
宵の空に星は瞬く

ハルキ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

宵の空に星は瞬く

【Nコード】

N0524V

【作者名】

ハルキ

【あらすじ】

ネギの代わりに麻帆良学園に送り込まれた主人公が頑張るお話。原作開始前から深く関わってたりしてクラスの何人かは顔見知り。スペックは割とチートな癖に使い勝手はあまり良くないので持て余し気味。身体を張って生徒を守ります。ラブコメったりもします。戦闘シーンは描写が苦手なのでさっくり進める予定。

※タイトルはなんとなく。ニュアンスです。

プロローグ

帰りたい。

今のアサギの心情を一言で表すところである。

つい先ほどまで自室で趣味に没頭していたはずのアサギが現在いる場所はメルディアナ魔法学園の校長室。

正面には机を挟んで校長が、アサギの後ろには仁王立ちのアーニャと心配顔のネカネ。

更に自身の身体は縄で縛られ身動きが取れない状態で椅子に座らされている。

まさに前門の虎、後門の狼といった布陣で完全に退路を絶たれていた。

「とりあえず、用件を聞こうか」

「縛られてる癖に何でそんなに偉そうなのよ！何でここに連れてこられたか分かっていてるんでしょーね！？」

「や、全く。そもそも何で縛られてんのかも謎だし。話は聞くからさっさと済ましてよ校長」

「肝が据わっているのか、神経が図太いのか：相変わらず大した玉じゃな。回りくどいのは好かんだろうから率直に言おう。：アサギ・スプリングフィールド。お主には日本で教師をやって欲しいのじゃ」

「：日本で教師？なんでさ？」

未だに状況を飲み込めないアサギに対し、校長は一つ一つ説明をする。

曰く。授業日数が足りず、このままでは留年確定。

曰く。足りない授業日数は特別課題をこなせばチャラになる。

曰く。この特別課題は卒業における最終課題でもある。

「つまり、留年者を出したくないから理由つけてなんとか卒業させたい、と」

「アンタがちゃんと授業に出てたらこんなことにはならなかったのよー!!」

「一応学校には行ってたっつーの」

「授業に出なきゃ意味ないって言ってるのよー!!」

アーニヤのとび蹴りが頭部を直撃し、アサギは脳天に衝撃を食らった。

ぐえ、とうめき声が聞こえたかと思うと椅子からぶっ飛ばされる。

「うー…身動き取れない相手にその仕打ちはひどくね…?」

「うっさい! 自業自得でしょ!!」

アーニヤの言うとおり、アサギは学校に来てもずっと図書館に籠りきりで授業には全くといっていいほど出ていなかった。

とはいえ、教科書の内容は全て把握していたアサギには授業など出る意味がなく、図書館の大量の書物を読み漁っている方が有効な時間といえたのだ。

もともと生まれつき魔法が使えない体質の所為で実技はからっきし。一般の魔法使いが目指す「マギステル・マギ」の素質は無く、本人も目指す気は全く無い。

膨大な書物をあさっていたお蔭で座学の試験だけはトップレベルだがなにより出席日数が圧倒的に足りず、留年はほぼ確実といえた。

「ええ…それは理不尽すぎるだろー…。…ん、痛みは無くなったよ。

ありがとネカネ」

アーニヤの蹴りによってできたたんこぶをネカネに直してもらいながら、再び校長に向き合う。

目の前で苛烈なやりとりがあつたというのに全く動じないのは見慣れている所為だからだろうか。

「まあ、少し早めの卒業試験とでも思ってくれればいい。課題が教師なのはワシの友人がそこで学園理事を務めているじゃが、人員が足りぬらしくてな。アサギは語学に長けておるし、なにより前に日本に住んでおったじやろう？ 人材としても丁度いいと思つてな」

「…前に日本にいたからつてだけでオレを派遣するのはどーなん？ 日本語が堪能な奴ならそれなりにいるだろ」

「こちらも人手不足でな、あまり人員を割けぬ事情があるんじや。アサギには悪いがの」

校長の目を見るとそれだけではなく別の事情が絡んでいるのは分かつていた。

アサギ本人は留年について特に気にしていなくとも周りもそうとは限らないということ。

―かの英雄、ナギ・スプリングフィールドと同じの姓を持つ者が留年するなどあつてはならない。

英雄の姓を名乗っているだけでそれと同じ何かを望み、汚点を残すことを良しとしない輩が多く存在する。

アサギがメルディア魔法学校に入学した当初からそれはあつたが、体質のことを知ると過度な期待を寄せる連中はいなくなっていたが、

未だに「何か」を望む者達が存在することも確かな事実。
何らかの思惑が学校内に巡り、こうして校長を通じて表に出てきた
ということだ。

ここで校長を追求したところで何も話してはくれないだろう。
アサギは小さく溜息を吐くと了承の返事をした。

「はあ…いいよ、行くよ。もう決まったことなんだろうし。ちなみにいつから？」

「辛い役目を押し付けてすまんが、よろしく頼む。向こうの学園は夏季休暇中だから赴任は休み明けの二週間後になる」

「二週間後か…日本に出発するの一週間早めてもいいかね？赴任先に行く前に昔住んでた場所に寄りたいんだ」

アーニヤとネカネの顔が悲しげなのが気になったが、引越し作業の事で気が滅入っていたアサギは特に気にとめることはなかった。

「さて、部屋を片付けるか」

「…毎回アサギの部屋に来る度思うんだけどよくこんな足の踏み場も無い場所で生活できるわね」

日本へと旅立つにあたり、まずやるべき事は1つ。

向こうに持っていく荷物の荷造りである。

しかしアサギの部屋は趣味の為の作業場と化しておりガラクタや紙やら工具やら色々なものが散乱して足の踏み場も無い状態だった。そのため荷造り云々の前に部屋の片づけをするとところから始めなければいけない。

1人では途方も無い時間がかかりそうだったのでネカネとアーニヤを応援と呼び、手伝ってもらう算段だが1日で片づけが終わるかは怪しいところだった。

「ここは魔法具を作るための作業場だから生活できなくても別に困らないけどな。あーでも向こうだと部屋が狭いんだった：持ってた工具は最低限にしとくか：。悪いけどネカネは向こうに持ってく衣類をまとめてくれる？」

「ええ。服は収納鞆に入れておくからね」

「ん、よろしく。で、アーニヤはオレと作業場の整理な」

「はいはい。どーせ、いつもの分別作業でしょ」

アサギは趣味で魔法具を作っている。

傍から見ればそれは趣味の範疇を超えており、魔法学校の先生でさえ関心する程の出来。

しかも道具そのものに不思議な力が込められているマジックアイテムとは異なり、道具そのものに魔法が込められている事はほとんど無い。

アサギの作る魔法具には予め術式や呪文などが刻まれていて、使用者が道具に自身の魔力を込める事で特定の魔法を発動できるというもの。

つまり魔力さえあれば呪文を唱えずとも魔法を発動できる代物だった。

魔法具の形は見に付けられるもの、つまりアクセサリーの形をとることが多かった。

魔力を込めれば魔法が発動できるという利便性と危険性を考慮した結果、魔法具の使用者が身に付けている状態で発動出来るようにと改良に改良を重ねてアクセサリーという形に落ち着いている。

それに加えてこの魔法具はアクセサリーとしてのデザインも良く、メルディアナ魔法学校の女生徒の間では有名だ。

小遣い稼ぎにと始めたものだったが今では『Nagisa』という
アクセサリーブランドとして確立してしまい、ちょっとした人気を
博していた。

部屋にある棚やケースにはそんな職人アサギが作成した作品の数々
が並んでいる。

「アーニャ、そこにある魔法具の山だけどさ、依頼品だから後で渡
しといて。向こうに行ったら当分依頼は受けられないだろうし」

「分かってるわよ。アサギって面倒臭がる癖にこういうところしか
りしてるのよね。しかもまた随分と作ったみたいだけどいくつ
くらいあるの？」

「んー、大体100ちょいじゃね？最近は自分専用の魔法具を作っ
てたから依頼を溜めてたんだよ」

「ひ、100って…。作り終えてるから何も言わないけど。あれ、
アサギって自分用の魔法具持ってたんじゃないの？」

「んーとな。1つの魔法具につき1つの魔法しか発動できないのが
煩わしくてさ、1つの魔法具に対して複数の魔法が登録できるよう
に色々改良してたんだ。今はまだ10個までしか一気に登録できな
いけど」

「アンタは一体どこに行こうとしてるのよ…」

「ま、オレは魔法が使えないからこれで補うしかないし」

「あ…ゴメン…」

「いやいや。今では魔法具作りが生業と言ってもいい位楽しんでる
よ」

不味い事を言ったと思ったのかアーニャが口を紡ぐ。

アサギは生まれつき魔力はあるのに呪文詠唱が出来ない体質だが本
人は特に悲観している様子は無い。

落ち込んでしまったアーニャの頭を優しく撫でて、気にするなと伝

える。

しばらく撫でているとアーニヤがぽつりと呟いた。

「…手紙、寄越しなさいよ」

「ん。分かってるさ。ああ、そうだ。これをアーニヤに」

アーニヤ前に跪くと、手を取り人差し指に指輪をはめる。

赤い宝石がちりばめられた細い指輪がアーニヤの指に通された。

「あ…綺麗…。これも、魔法具？」

「そ。炎授の指輪っていう魔法具で主な効能は炎の精霊との対話及び炎系魔法の強化」

「精霊との対話って…。またサラツとすごいもの作って…」

「ああ、あと指定した物以外は炎で傷つけないっていう効果もついている。せっかく綺麗な髪してんのにアーニヤってよくローブとか髪とか焦がすし、ちょうどいいかなと」

「き、ききき綺麗とかっ！何言ってっ！」

わたわたと慌てふためくアーニヤを見ているのも楽しいが片付けの時間は惜しい。

必要最低限の工具と素材をまとめ終わると未だオーバーヒートしているアーニヤを置いてネカネの下に向かい荷造りを終わらせた。

その後夕食をとり、久々に3人でベッドに入る。

ダブルベッドに3人は些か窮屈だったが密着することでなんとか寝れそうではある。

「ん、アーニヤはぬくいな。ネカネも良い抱き心地だし、これなら狭くても良く眠れそうだ」

「オジサン臭いこと言わないでよう…」

「ふふっ。でも、こうして一緒に寝たり出来ないのは寂しいわね」

「確かに二人の温もりが無いのはちょいキツイかもしれないね。向こうで2人の代わりでも見つけるかなー」

その言葉に反応した二人はアサギの方を見ると、

「それはダメよ」！！」

「…なんでさ？」

2人の声が綺麗に重なる。

人すら射殺せそうなくらいの眼力で睥まれた。

「アサギの抱き心地が良いから」

渡さないわよ、と再び声が重なる。

そのまま両側からぎゅうと抱きしめられながら眠りにつくのだった。

日本へと出発する当日。

だと言うのに、アサギはメルディアナ魔法学校の地下へと足を運んでいた。

学校の地下は暗く、そしてとても静かだ。螺旋状の階段を下りて地下の扉を開く。

重々しい音を立てながら開かれた扉の奥にはおびただしい数の石像が置かれていた。

いや、それは石像などではない。そこにいるのは紛れも無く人間だ。6年前、かつて住んでいた村が悪魔によって襲撃され、村人のほと

んどは石化魔法によって石にされた。
あの場において生き残ったのは、アサギとネカネだけ。

「…スタンジーさん」

石像の一つに近付き、かつて自分の面倒をみてくれていた者の名を呼んだ。

口は悪かったが自分のような問題児にまで目を掛けてくれた優しい人。

その横に置かれている自分の身長的一半よりも更に小さな石像に視線を落としたところで、校長がやってきた。

「今日、日本を発つのだろう。ネカネとアーニヤが探しておったぞ」

「そりゃ2人には悪い事したかな。…でも、日本に行く前に皆に挨拶しと思うってさ」

当分戻ってこれないだろうから、と小さな石像の前にしゃがむとその頭を軽く撫でる。

時折アーニヤが来て石像の手入れをしているお陰で埃はほとんどなかった。

「すまぬ。いつもアサギには辛い役目を負わせてしまうな…」

「いんや。もともとオレはそういうのが役目みたいなもんだし、別に気にしてないよ。皮肉でもなんでもなくね」

「……」

「赴任先の学校の資料を見たけど訳ありというか一筋縄じゃないかなというか。自分が受け持つクラスの生徒は一癖も二癖もありそうな連中ばっかだし、退屈はしなさそうだ」

にひひ、と癖のある笑みを見せて笑うと先程とは打って変わってまじめな声で「それに」と付け加えた。

「…昔馴染みの顔をいくつか見つけたよ。事情を知ってるオレからすればあいつらはいいいだ。多分、何かしら危険に晒されたり狙われる事になると思う。…だから、守りたいんだ」

何も守れないのは嫌だから、と悲痛な面持ちの校長に向かってアサギは苦笑気味に言う。

「…アサギ」

撫でていた手を止め、小さな石像を見据えて、呟いた。

「行ってくるよ。…ネギ」

そのまま勢い良く立ち上がり、踵を返して部屋を出る。
後ろを振り向くことは一度として無かった。

プロローグ（後書き）

初投稿。

色々ときどきです。

1話

出発日を一週間早めてアサギ立ち寄った場所は日本の京都。空港を出るとそこには昔の知人が立っていた。

「や、詠春久しぶり。会えて嬉しいよ。まさか直々に迎えにきてくれるとは思わなかったけど」

「私입니다。アサギも見ないうちに随分成長していて驚きました」

日本に行く事は既に手紙で知らせておいたがまさか本人が迎えに来るとは思っていなかったが、思わぬサプライズに長旅の疲れなど何処かへ行ったようだ。

詠春と共に歩きながらしばらく言葉に花を咲かせた。

「そういえば木乃香と刹那がオレが受け持つクラスにいるみたいでさ。京都を離れてウェールズに行った時は別れの言葉を言う暇も無かったから会うのが少しばかり複雑なんだけど」

「はは、二人供アサギに懷いてましたからね。アサギが居なくなつた時の二人の落ち込みようといったらそれはそれは凄まじいものでしたよ」

「あー…そうか…。二人に責められんのを覚悟しとかなきゃなあ…」

がりがりと頭をかきながら昔の事を思い出す。

詠春と知り合ったのはいつの頃だったか。もう何年も前の事でよく覚えていないのが正直な所だ。

アサギはとある事件で詠春の所属していた「紅き翼」に助けられた。身寄りはおらず行く当てのないアサギはそのまま「紅き翼」と一緒に行動するようになり、ナギ達と各地を転々としていた。

日本の京都に訪れたのは今から十数年前。

ナギに付いて京都に来たが危険だからと言われ、そのまま詠春の元へ預けられて数年程京都で過ごすことになる。

その時に木乃香や刹那と出会ったのが始まりだ。

一緒に遊ぶと言うよりも仲良く遊ぶ木乃香と刹那をアサギが見守るということが多かったのだが、面倒見が良く、子供にしては落ち着いていたアサギに2人はよく懐いていた。

しかし、その日々は突然に終わりを告げる。

とある事情によりアサギがウェールズに行かなければいけなくなっただからだ。

せめて木乃香と刹那には別れの挨拶を言いたかった。しかしそれは叶わず。

結果的に黙って京都を離れたことをずっと気にしていた。

「木乃香も刹那君も理由を話せば分かってくれますよ」

「ん：まあ、たとえ許してくれなくてもいいさ。可愛い妹達であり、生徒だから」

だから、守るよ。

そんな意味合いを込めて詠春を見据える。

「ええ。2人の事をよろしく頼みます。出来れば平和に過ごして欲しいですが、そうはいかないのでしょうか」

「多分ね。オレが麻帆良に呼ばれたのはその為の火除けか目晦ましなんだろうけど、向こうはどこまで知ってるのかね？」

アサギが抱える事情や体質などについてどこまで把握しているのか、それらを分かった上でアサギを呼んだのか。

ただ英語教師として呼んだ訳ではない事は承知している。

アサギが受け持つクラスの中に魔法に関わりがある生徒が何人かい

る事は把握済みだ。

そういった生徒の監視が目的なのかあるいはアサギに注意を向けさせて生徒を守らせようというのか、向こうの真意が分からない。

「向こうにはタカミチがいますからある程度のことは把握済みでしょう。だとしても君を日本に呼び寄せた事に些か不安ではありませんがね。全くお義父さんも何を考えているやら…」

「さーてねえ。けどクラス名簿見てたら姫絡みっぽい気もするし、言われんでもやる事はやるさ。あとナギの尻拭いもか」

「…アスナ君とエヴァですか」

「そ。ナギがエヴァにかけた封印解かなきゃいかんし。アスナはオレを覚えてるのがまず問題なんだけど」

記憶はあるのか？と詠春に問えば返ってきたのは否定。

ガトウの死後、タカミチが過去の記憶を封印したことを告げる。それを聞いたアサギはやはりそうかと軽く唸った。

「やっぱりそうだったかー。まあ、いいけど」

「…辛くはないんですか？」

「というか、昔アスナと離れる前に『お互いの事を忘れても絶対に思い出す』っていう誓約をね？してさ。単純な御呪いだけどシンプル故に強力で、記憶の消去、封印、忘却なんかの魔法をかけられても再会した時には必ずお互いの事を思い出すようになってるからそんなに辛くはないかな」

「は、はは…そんな事まで…」

そう呟くと驚いたような視線が詠春から向けられる。

まさかそんな事をしてとは思ってもいなかった、という表情にそりゃそうだよなあとアサギは苦笑する。

「にはは、これタカミチと学園長には内緒な？どうせばれるんだろ
うけど思惑通りに動くのもなんか癪だし」

「ええ、私からは何も言いませんよ」

「別に今回の事を予見してたわけじゃないけど。備えあれば憂いなし
ってこういう事を言うのかねー……って事で、詠春にはこれからの
事に備える為に強力して欲しいのさ。あ、拒否権は無いよ？生徒
の為だからな」

悪戯を企む子供のような笑みを詠春に向ける。

その表情は十数年前には見られなかったものであり、アサギの過去
を知る1人である詠春としては何やら感慨深いものがあつた。

「ふむ、私に出来ることならば喜んでやりましょう。他でもないア
サギの頼みですからね」

「ん、ありがと。じゃあ早速だけど…」

詠春にビー玉が半分になったような透明な石を渡し、自分も同じよ
うな石を掌に乗せる。

『誰が聞いているか分かんないし念話で伝える。ちなみにこの石は対
の石を持つてる人としか念話できないようになってるから盗聴の心
配はないよ』

糸無し糸電話みたいなもんだよ、と付け加えて本題に入る。

アサギが依頼した事はそう多くはない。

しかし詠春からするととてもない労力を担うものだった。

悩ましげな表情と共に小さく唸り声を呟いた後、詠春は了承した。

「悪いね、しんどい役目を負わせて。でも何が起こるかなんて分か
らないからさ、できる事を今の内にやっときたいんだよ。その為に

やなんだってするさ」

「いやいや、君にまで色々指摘されては腰を上げないわけにはいきません。私もどうにかしなければと思っていましたし」

「ん、よろしく頼むよ。オレもできる事をやってかなきゃいけないしな」

いやあ大変だと言いつつもその顔は笑っていた。

その後、自分も昔住んでいた木乃香の実家に一泊し、次の日の早朝に麻帆良へと出発した。

1話（後書き）

キャラクターの設定とか全く載せてないことに気がついた。
というかなんでしょうか…？

2話

「はるばる遠いところから御苦労じゃったのお。お主の事はメルデアアナの校長と高畑君からよく聞いておるよ」

目の前にいるのはかの有名な日本の妖怪…ではなく。

現在アサギは朝早くに麻帆良学園の長である近衛近衛門の所を訪れていた。

近衛門の横にはタカミチが控えており、前にあったときよりも随分老けたなあのアサギは思う。

「ども。アサギ・スプリングフィールドです。留年しそうなので単位取得の為に此方で教師としてやってきました。これからよろしくお願いします。……えー建前としてはそんな理由ですけど本当の所は魔法関係で呼ばれたんですよね？」

「…間違っではおらんのだが、もう少しおぶらーとに包んでもいいんじゃないかのう」

「腹の探りあいつて好きじゃないんで。使われるのは構わないんですけど踊らされるのって腹立つでしょ？」

「ま、そうじゃの。お主のいいたい事も分からないわけではない」

此処に呼んだ理由。癖のある面子が揃った2-Aの担任にした理由について学園長が語り始める。

大抵の理由はアサギが睨んだとおりのものだった。

度々学園を襲う襲撃者や魔法世界において重要人物である生徒を守る事。

そして割とガチで2-Aの成績を何とかして欲しい事。

…2つ目は正直予想外だったが、もともとそのつもりだったのでど

ちらも快く了承した。

「頼まれたからにはやるけどさ。オレが魔法使えないのは知ってるよね？」

「その点について僕から学園長に話しておいた。君の能力の事もね」「高畑君からお主の能力について聞いてはおるが、ちよいと此処で使ってみてはくれんかの？」

「いいですよ。んじゃ魔法をオレに向かってなんか唱えてください」

学園長が魔法の射手を唱えると1本の光の矢がアサギに向かって飛んでいく。

1本とはいえあたれば殴られるのと同じくらい痛いのだが避ける素振りは一切無い。

自身に向かってくる光の矢に対してアサギが手を向ける。

すると、光の矢は手の平へと吸い込まれて消えていった。

「これがオレの能力の一つ。相手が放った魔法を『吸収』する力です。そして――」

手を学園長へと向けると先ほどの光の矢が勢いよく掌から飛び出した。

それは学園長に当たる前にタカミチが弾き返す。

「フォッ!？」

「これが『放出』。オレは2つ合わせて【キャッチ&リリース】って呼んでます」

「アサギ君、わざわざ学園長に向けなくても…」

「実演しろって言ったのは学園長だし。これくらいなら避けれたでしょ」

抗議される謂れはないよとアサギの弁。

「ま、能力に関してはこんな感じですよ。呪文詠唱は出来ませんが魔力はあるので自作の魔法具を使えば多少は魔法を使えます」

実物の魔法具を2人に見せながら説明をする。

魔力を流し込むだけで魔法具に登録された魔法を発動出来ること。

1つの魔法具に登録できる魔法は限られていること。

魔法の難易度によって流し込む魔力が変わること。

依頼があれば魔法具を作るが補助系魔法が登録されたものしか作らないこと。

「フム：興味深いのう。しかし何故補助系魔法の魔法具しか作らないんじゃ？」

「自分用には攻撃系魔法が登録された魔法具をいくつか作ってますよ。『他人』に作らないようにしてるんです。悪用されてそれが広まったら商売あがったりでしょ？」

「成程のお…」

「とまあ、魔法具を使って魔法の発動は出来るけど予め登録されたものしか使えません。それに武道の類は習ってないから一般人並の力しかないって事を覚えておいてほしいんです」

アサギ自身に魔法は聞かないが肉弾戦はからつきしだという事を学園長に伝える。

身体強化系の魔法に登録している魔法具はいくつか作っている。

しかしそれを使用したところでプロの武闘家や剣士などに適うわけではない。

身体能力だけで見れば同等の力を手に入れられるかもしれないが、どれだけ身体を強化してもその肉体を効率良く運用する術をアサギは持っていないのだ。

魔法を吸収してしまうのは魔法使いにしてみれば脅威に見えるが、逆に言うとそのだけしか出来ない。

もし魔法剣士のような肉体派な魔法使いが相手ならばあつという間に負けてしまうという事だ。

学園長もそれを理解してくれたようで魔法関係の仕事はなるべく回さないように考慮すると言った。

「ありがとうございます。タカミチがオレを無駄に持ち上げてみたいで、なんか期待させてすみません」

ジト目でタカミチを睨む。

しかし当の本人は何処吹く風なのが気に入らない。

「いやいや、気にする事はないぞい。お主の能力が魔法使いにとって脅威なのは事実。その時がくればお主の力が必要になる時がくるじやろうて」

「そう言ってもらえると助かります。まあ、こんな体質なんで守るといっても限界がありますし、護衛対象に魔法がばれる可能性も大きいんですけど」

「フム、その辺りに関してはワシが責任を取ろう」

その時はその時じゃよ、と学園長。

「分かりました。この身でどこまで出来るか分かりませんが生徒はオレが守ります」

「よく言った！アサギ・スプリングフィールド。まずは試用期間として今学期いっぱい教育実習として勤めてもらうことになるかのう。そうそう、お主の部屋なのじゃが教職用の寄宿舎の都合がつかなくての、空いてる部屋が女子寮にしか無いんじゃが構わんか？」

「魔法具制作とかしたいので1人部屋なら構いません。それに生徒

と教師が同室というのもまずいでしようし」

「良いじゃろう。そろそろ荷物がこちらに届くようじゃし、そのように手配しておこう。女子寮までの道を途中までじゃが高畑君に案内してもらおうといい」

学園長室を後にし、タカミチと共に女子寮へと向かった。

顔見知りである2人は昔話を交えながら女子寮への道を歩いていく。途中までしか案内してもらえないのはタカミチが男性だということと女子寮には噂好きの女子が大勢いることへの配慮である。

「随分見ない間に大きくなっていて驚いたよ。魔法具まで作れるなんて凄いじゃないか」

「必要に駆られたただだよ。魔法は使えなくとも魔力があったのが不幸中の幸いだっただけ。最近じゃ自分の身を守るって意味でも身体も鍛えなきゃなーと思うしさ。タカミチ、鍛えてくれん？」

「うーん、そうしたいのは山々なんだけどね……。これでも忙しい身でね、出張が多くてあまり学園にいないんだ」

どうせ魔法絡みの出張なんだろう、と聞くと肯定を示す苦笑が返ってくるだけだった。

「そっちも大事なのは分かるけどさ、生徒の事にも気を配らんと愛想つかされるぞ」

「ハハ、いや彼女達は逞しすぎて僕じゃもう手に負えないんだよ」

まあ確かに、とアサギは思う。

2-Aクラスの資料に目を通しているがとにかく個性が強い面子が多い。

本音を言ってしまうえばあのクラスを果たして自分がまとめられるのか不安はある。

別に悩んでいる訳ではなく、馴染んでしまえばどうとでもなるだろうと思っではいるが。

それよりも懸念すべきことがアサギにはあった。

「ああ、タカミチには先に言っとく。オレは魔法の秘匿よりも生徒の安全を優先して動くって事を伝えておくよ。勿論、普段はばれないように気をつけるさ。けど生徒の誰かに危険が迫っていたら容赦なくオレは力を使う」

「ふう……アサギ君ならそう言うんじゃないかと思っていたよ。君は、変わらないね」

「変わらないさ。歪んでるとしてもそういう生き方しか知らないからな」

強めの風が吹き、道端の葉を一気に巻き上げる。

日陰を歩いているとはいえ猛暑の中を歩いていた2人にとっては救いの風となった。

しばらくの間風に身を委ねつつ道を歩いていたが不意にアサギが呟く。

「アスナの記憶のことだけどさ。オレと再会すると思い出すようになってんだ」

アサギとアスナが離れる前にしたおまじないの事を話す。

記憶を思い出すおまじないといっても昔の記憶が一気に蘇ることはない。

そんな事をしてしまったら意識と記憶にズレが生じて人格が壊れてしまう恐れがある。

だから最初は昔の記憶を夢として見せ、それから現在の人格に影響が出ない程度に徐々に思い出していくだろうとタカミチに告げる。

「ま、ファーストコンタクトでいきなり全部思い出すわけじゃないから安心してよ。そんな事したらアスナが壊れるかもしれんし。：ガトウの事は詠春に聞いた。記憶を封印したタカミチには悪いけどさ、アスナはオレと離れるとき「忘れたくない」って言ったんだよ。だからお互いにまじないをかけたんだ。例え辛い事があったとしても忘れちゃいけないんだよ」

「：君が言うのと重みがあるね」

「にはは。そりゃあ経験者だからな。アスナと違って全部覚えてるし」

「：そうだったね。僕が言えた義理じゃないがアスナ君の事、よろしく頼むよ」

「言われなくとも、そのつもりだよ」

タカミチと別れ、女子寮への道を歩いていく。

寮の方には既に荷物が届いているようで、入り口の前にはダンボールが山積みになされていた。

「ていうか、部屋の中まで持ってつてくれてもよくね？」

まだ休暇中ということもあってか、寮には人気があまりない。

誰かの手を借りたいところだったが仕方ない、と諦めて運び始めたのだった。

「これ今日中に運び終わるのかな…？」

その呟きに答えるものは誰も、いない。

2話（後書き）

ほとんど野郎ばっかとしか喋ってないよ！
いい加減、女の子と喋らせたい。
フラグを立てたい…。

3話

「あーしんど…」

全ての荷物を部屋に運び終わる頃には日は沈み、辺りは暗くなっていた。

荷物を運ぶために部屋と玄関を何度も往復していたのに寮に住む生徒と全くすれ違うことはなかった。

少しばかり不思議に思ったがおそらく夏季休暇だから里帰りやら何やらで部屋を空けているのだろう。

しばしの休憩を経てダンボールの中身を整理しようとしたが積み上げられた箱の数を見て溜め息を吐く。

馬鹿みたいに天井まで積み上げられたダンボールは部屋の半分を占拠している。

なんていうかもうダンボールの中身を自力で整理する気が無くなるレベルだった。

「もーいいやこれで」

人差し指に指輪をはめてちよちよいつと指を振ると殺風景だった部屋があつという間に彩られる。

さっきまでの圧迫感は無くなってぎゅうぎゅうに物が詰められていたダンボールはペシャンコになって玄関の前にたたまれていた。

ゴミ出しは明日でいいやとソファに腰掛けながら一息ついていると腹の虫がくると音を立てた。

そういえば学園を訪れてから何も口にしていない。

別に今日くらい食わなくても平気なのだが、アーニヤとネカネに口

酸っぱく食事を取れと言われていることを思い出し疲れた身体を起こしてキッチンへと向かう。

冷蔵庫の扉を開けるとアサギは崩れ落ちた。

「って食料ないんだった…」

当たり前のことだが引越しの荷物の中に食料は入っていない。

あとで買い込む予定だったのだから冷蔵庫の中はものの見事に空っぽ。

キャンディーの類だけならば大量に持ってきているのだが飴だけでは空腹は満たされない。

一度は夕食を食べる気になったのだから腹の虫を収めない事には眠れない気がした。

休みなのだから寮の食堂は勿論やってない。

「うあー…」

腹減った、という言葉が呻き声にしかない。

外で何か買って食べようと仕方なく疲労感の残る身体を起こした。

よろよろふらふらと覚束無い足取りで寮の廊下を歩いていると、

「うあ…?」

「ひゃっ?」

空腹の所為で視界があやふやで誰かとぶつかる。

かろうじて倒れずにすんだがぶつかった相手に寄りかかってしまう。

「あー…ごめー」

ん、と言い切る前に懐かしい声が耳に触れた。

「…あさぎねーさま？」

自分の名前を呼ばれ、ついと目線だけを下に移す。

艶やかな長い黒髪と戸惑いを秘めた瞳がアサギの目に映った。
この顔には、覚えがある。

「この、か…？」

「あさぎ、ねーさま…あ…あさぎねーさまやっ！えっ、えっ？な、
なんで寮におるん！？」

「ぐえ…：…つちよ、この…！待っ…苦し…っ」

思いがけない再会に驚く暇も無くテンパるこのかに胸倉を掴まれが
くがくと激しく揺さぶられた。

小さな身体はどこにそんな力があるのかという程の腕力と握力でも
って気管を圧迫される。

元々空腹のところに窒息のコンボとくれば一体脳は何処から栄養を
取ればいいのかだろう。

「うえ…も、だめ…：…きゅう」

「あさぎねーさま答えてやー！…：…ってあれ？あ、あさぎねーさま
ー！？」

疲労、空腹、窒息のトリプルコンボを食らっては最早為す術はなし。
このかによって最後の止めを刺されたアサギの意識は暗闇へと沈ん
でいった。

がつがつがつ。

部屋に響くのは少し大きめの咀嚼音。

右手にはおにぎり、左手にはサンドイッチ。

それらを交互に頬張り、椀子蕎麦を食べるが如き速さで次から次へと平らげていた。

炭水化物&炭水化物という組み合わせではあるが空腹を満たすことが重要事項のアサギにとっては微々たる問題でしかない。

「おふぁふぁひ！（おかわり！）」

「はいな、まだまだあるからぎよーさん食べてやー」

にこにこ幸せそうな笑顔を振りまきながらこのかは追加の食事を作りにキッチンに向かう。

あの後気を失ったアサギを介抱しようとなんとか自室に入れ、腹の虫に気付いたこのかはアサギが目覚めたときの為に軽食を作っていた。

目を覚ましたアサギは目の前に並べられた食事になんの疑問も持たずにがつがつと食べ始め――

今に至る。

「がつがつが…っ！？んぐう…！」

「はいお茶。そんなに焦らんでもご飯は逃げへんよー？」

喉に詰まらせて苦しみ出したあたりでお茶を渡され、勢いよく飲み干した。

ぐつきゅぐつきゅ、ぷはあっ!!と擬音にすると非常に親父くさいものになるがそこは置いておく。

「ふうー……ぐっそさん!」

「はい、お粗末さんやー。いい食べっぷりやったなあ」

「いやだってどれも美味しいさ。おにぎりとか久々に食べたから懐かしくてな」

「ホンマに? ねーさまにそう言って貰えると嬉しいわあ」

食後に一息つきつつ、ここにいる経緯をこのかに説明した。

無論、魔法関係の事は伏せている。

教師として麻帆良に呼ばれた事、2-Aの担任になる事。

そしてこの女子寮に住むことなどを大まかに話す。

「はー…ねーさまが教師なあ。ウチのクラスの担任になるなんて新学期が楽しみやわあ」

「ま、教師といっても今学期は教育実習扱いなんだけどな…お? でした?」

向かいに座っていたこのかが立ち上がるとアサギの背中に回りこむ。そして、そのままぎゅうと抱きしめられる。

このかは何も言わず、ただ思いきり抱きしめてアサギの感触や匂いを確かめていた。

「えへへー。あさぎねーさま、いーにおいー」

ぐりぐりと背中に顔を押し付けながら心から幸せそうな声で呟く。頭を撫でてやりたかったが、身体はホールドされて動けなくなっていたのでそれは適わず。

後で撫でようと心の中で決め、今はこのかの好きなようにさせる。

ふと、京都のこのかの実家に居候していた時の事を思い出す。
小さい頃はこのかと刹那がくっついてくるから2人まとめて抱きしめたりしていたことを――

と、そこまで思い出して何かが足りないと気がついた。

刹那がない。

「なあ、このか。刹那は寮にいるのか？」

「う、うん。せっちゃんが多分、部屋におると思うけど…」

当時は抱きしめるときは2人一緒というのがデフォルトになっていたお陰で、このか1人だと物足りないと感じていた。

このかだけでも抱き心地は満足できるのだが、2人同時に抱きしめるのはまた別の話だ。

「そか。じゃ刹那とこ行くか」

「え？ ええっ？」

思い立ったが吉日と刹那の部屋に向かう。

その際にこのかが行かないと渋ったが、2人一緒に抱きしめたいアサギとしてはそんな意見は当然却下。

もじもじしているこのかを横抱きにした状態でずんずんと歩く。

このかの顔は赤くしかも軽く涙目になってなにやら慌てていたが当然無視である。

「ねっ、ねーさま降ろしてやつ。これ、結構恥ずかしーんやけど！？」

「えーと、ここが刹那の部屋か」

「ちよお話を聞いてやー！」

このかの静止も聞かず、刹那の部屋をノックした。

3話（後書き）

このかの部屋にはアスナもいたけど熟睡してたんです。
そして主人公がなんか壊れてきたけど気にしない。

4話（前書き）

なかなか進まない。

4話

刹那の部屋に特攻してからのアサギの行動は早かった。

ドアを開けたのが刹那だと分かるや否や横抱きのこのかを左腕に収め直し、自由になった右腕であっという間刹那を引き寄せ、このかと刹那の2人の頭をこれでもかというくらいぐりぐりと撫で回してやった。

突然の事に始めは混乱していた刹那だったが昔の事を思い出したのか、数分後には借りてきた猫のように大人しく撫でられていた。

刹那が落ち着いた頃を見計らって麻帆良学園にいる理由を掻い摘んで説明し、一応は納得してもらえたようだ。

そんな感動もなにもあったものじゃない再会を終えて、アサギはふと気付く。

「なあ、なんで2人はそんな余所余所しいんだ？昔はあんなに仲良かったじゃんか」

「えっと…」

このかがちらりと刹那を見た。

「それは、その…」

しかし刹那はその視線から逃れるように顔を背け、言葉を濁すのみ。京都を離れてから2人に何があったのかアサギは知らないし、問い詰める気もない。

けれど喧嘩や仲違いの類ではないのだろう。

アサギにはお互いを意識しているが何らかの出来事が起こりその所為で距離を測りかねているように見えた。

「このかは刹那が好きか？」

「え…っ？もちろん、せっちゃんの事は大好きや」

「よし。じゃあ刹那は？このかが好きか？」

「は…はい。このちゃ…このかお嬢様の事はその…す、すす、好き…です」

恥ずかしがりながらもお互いに想いあっているのは分かった。

あとは後押しさえすればどうとでもなる。

「ん。それならいいんだ」

2人の答えに満足したアサギはわしわしと頭を撫でながら2人を思い切り抱きしめてやった。

再び取り乱す刹那とこのかを視界に納めながら「にはは」と笑う。

しばらく2人を可愛がった後は「ちよっくら2人きりで話してみ？」

と刹那とこのかを残して部屋を出た。

わだかまりが無くなるかどうかは分からないが、何かしらの変化はあるだろうと思いつながらドアに背を預けているとこちらにやってくる人影が1人。

刹那と同室の龍宮真名だ。

資料を読んでいたお陰で名前と顔はすぐに一致した。

初対面なのに警戒している様子がないのは向こうもアサギの情報を聞いているからだろう。

もしそうじゃないとしたらその道のプロ故の「いつでも仕留められる」という余裕なのかもしれない。

そうなる前に理由をさくっと言ってしまふことにした。

「や。新学期から2－Aの担任になるアサギ・スプリングフィール

ドです。どうぞよろしく」

「ああ、貴方のことはクライアントから聞いているよ。私は龍宮真名だ。…して私の部屋の前にいるのはどういう理由かな？」

「ちょっと同室の刹那に野暮用があつてね、ちよいと部屋を借りてるんだ」

部屋で刹那とこのかが仲直り（という事にしておいた）をしている事、昔馴染みの自分が仲介役をした事を簡潔に告げた。

「ふむ。確かに刹那と近衛が中で何かを話しているようだ。内容までは流石に聞き取れないが声のトーンを聞く限りではうまくまとまりそうな気配がありそうだが」

「すごいな、そんなんまで分かるんか。悪いけど一晩2人きりにさせてもいいかね？オレの部屋のベッドが1つ空いてるし、そこを提供するからさ」

「そうだな。流石に私でもこの部屋の中に入る気は起きないし、先生のお言葉に甘えさせてもらうよ」

明日になればきっと距離が縮まった2人が見れるだろうと思いつつ。真名を連れて自室へと戻った。

「おー？」

「つと、危ないな」

部屋に入ったと同時にアサギの身体が崩れ落ちた。

真名が反射的に支えたお陰で倒れずにはすんだのだが、身体が思うように動かない。

このかや刹那との再会イベントがあつたせいで忘れていたが引越しの作業で身体は疲労が溜まっていたのだ。

空腹は満たされたが疲労はまだ残ったまま。

自室に帰ってきたことで張っていた気が緩んだのか、無意識の内に身体の力を抜いてしまっていた。

真名に支えられながらベッドまで連れていってもらおう。

「悪いね、自分が思ってたよりも疲れてたみたいだし今日はもう大人しく寝るわ。シャワーとか自由に使って構わんよ」

「そうさせてもらおうかな。寝るのは結構だがせめて寝着か何かに着替える事を勧めるよ」

「ん…そだな。じゃあ悪いけどそベッドの横のタンスの上から2番目に入ってる服を取ってもらえるかね」

「これかな？」

「あーそれそれ。タオルは1番目の引き出しに入ってるから好きな使いな」

「ありがとう。先生も着替えたら早く寝るんだぞ」

真名がシャワーを浴びに行くのを見送ると、もそもそと着替え始める。

少々脱ぎ方が雑だが朝起きてどうせ洗濯するしいやと思착衣を全て脱いでベッドの脇にまとめて置いた。

いつも寝着にしている服を羽織り、ボタンをかけようとするが指に力が入らず上手くかけられない。

「も…いやこれで」

ボタンをかけるのを諦めそのままベッドに倒れこんだ。

うつらうつらと徐々に目蓋が降りていく感覚に身を委ねかけていたところに真名が戻ってきた。

「随分刺激的な格好だがせめてタオルケットくらいはかけたらどうかな」

「んー…」

肌蹴まくっている自身の格好などどうでもいいという感じで夢現のまま返事を返す。

そんなアサギにやれやれと呆れながら近くにおいてあるタオルケットをかけようとして、動きが止まった。

全開になっているボタンをかけ、晒されている胸元を隠してやる。

「おー…やさしーなあ たつみやはー」

「真名でいいよ先生」

「そか。じゃあ真名、ちよいこっちきて」

ちよいちよい。と真名に向かって手招き。

片方の手は口元に添えられていて内緒話でもあるのかと真名がベッドに寝たきりのアサギへと顔を近付けた。

「…っ！」

ぐい、と引っ張られたと思ったら口に何か当たる感触。そのまま中に押し込まれ、口の中に広がるのは甘い味。

「…にひひ、ごほーびをあげよう」

「こほっ、飴玉か…。驚かさなくてくれよ先生。危うく反撃するところだったぞ」

「それは勘弁。元氣の出る飴玉だから許してくれるかね」
「む、これは…」

ただの飴だと思っていたが、違うようだ。
確かに舐めていると身体の内側から力が沸き上がってくる様な感覚がじわじわとある。

「魔力が回復している…？」

「寝りゃ回復するんだろぅけどさ。今日のお礼とごほうびを兼ねてオレからの報酬ってことで。そんじゃおやすみ、真名」

満足げにそう言うと、意識の限界だったのかすぐに寝息を立て始めた。

アサギが眠ったのを見届けてからそっとタオルケットをかけなおす。

「…フ。報酬にしては甘すぎな気がするが、悪くは無いな」

そう呟いて、部屋の灯りを消した。

次の日。

刹那とこのかがアサギの部屋を訪れた際に何故かアサギと真名と同じベッドに寝ていた所を見てしまい一悶着あったのは余談である。

4話（後書き）

別にやましいことは何一つとして起こってないですよ。
：ほんとですよ？

クラス内に響き渡る黄色い歓声にびくつとした。

「すごいカッコいいー!」「どこ出身なんですか!?!」「せんせーの年が知りたいです!」「やーんキレイー!」「今日、寮にいましたよね!?!」「てゅーかスタイル良過ぎ!スリーサイズいくつなんですか!?!」

教壇に勢い良く生徒が密集し、質問が怒濤の如く投げかけられる。年頃の女の子特有の甲高い声に少々どころではない目眩がアサギを襲うもなんとか耐える。

「あー、一旦落ち着こう。質問は順番に聞くから席に戻って」

わいわいきゃーきゃーと騒がしい生徒達をなんとか宥めて席に座らせようとする。

皆が席に戻っている間に思わず疲労回復用の小さいロリポップを啜え、一息ついていると前に座っている生徒が立ち上がった。

「はいはい!それなら報道部の朝倉和美がクラスを代表して取り仕切るよー!先生には一問一答形式で答えてもらいますけどいいですよね?」

「ん、じゃあそれでいいとか。そのほうが此方としても助かるよ」

ワッ!と軽い歓声。

既に一時間目が始まっているが幸いな事に丁度英語の授業だから他の教師に迷惑がかかるということはない。

初日だし生徒との交流を深める意味も兼ねて今日はある程度好きにさせようとアサギは思った。

和美は教壇に近づくとアサギの隣に立ち、マイクに見立てたボール

ペンを口元に近づけた。

「じゃあ第一問。スリーサイズは？」

「え、初っ端からそこ？ えーと、上から76、53、77だったかな」

「細っ！？」とか「白衣着てるから着痩せしてるのかと思った…」とか「フツーにスタイルいいとか羨ましいわー」などという声がちらほらと聞こえる。

やはり女の子はスタイルを気にする生き物なんだろう。

「第二問っ。年はいくつ？」

「んー、19歳」

年齢の割に大人っぽいと言う声上がる。

「え、老けて見える？」と聞いてみるもそういうわけではないらしいが言われている身としてはどこか複雑な気分になる。

那波千鶴、龍宮真名、長瀬楓からはどこか同情めいた視線で見られていたのが若干気になった。

「第三問！ 恋人は？」

「突っ込んだこと聞くなあ。まあ、いないけど」

何故か「彼氏も彼女もないんですか？」と聞かれたがないものはいないとしたか答えられない。

面倒なのでアサギは募集もしてないと追加で答えておいた。

「第四問。趣味は？」

「アクセサリー制作」

ざわざわされた。

生徒達からすると意外な回答だったようだ。

「第五問。好きな食べ物は何？」

「甘い物。自分で作ったりもするけど」

これまたざわざわされた。

「意外と乙女なのかな」などと失礼な言葉が聞こえてきたが見た目のイメージから連想しづらいんだろう。そういうことにしておく。

「フムフム。じゃあ次。先生が今啜ってるのは？さっきから気にはなってたんだけど」

「あーこれ？ロリポップ…えーっと、こっちで言うところの棒付きキャンデー。ちなみにこれも手作りね」

口から飴を取り出して見せる。

「アラ、先生が授業中にそんなもの食べてていいのかな？」

「ん？食べたいならあげるよ？」

「…へ？…んう…っ！？」

ほい、といいながら見せていた飴を和美の口に突っ込んだ。

「ど？…美味しいでしょ？」

「う…え…は、はい…」

報道部としていろんな人間を取材してきた和美にとってもこの対応は正直予想しておらず、呆けた返事しか返せない。

常識外れの麻帆良学園においても授業中に飴を舐めている教師及び

生徒は居なかった。

だからそれを指摘すれば慌てるなり口外しないようにお願いするだろう、と。

そして下手に出たところでそれをネタにしたりクラス内で騒いだりといつもの2－Aの流れになるだろうと思っていた、が。

自分の飴を生徒に食べさせるという予想外の結果。

そんな思いがけないアサギの行動に和美を含め生徒達はフリーズし、

「「「「ええええええーっっっ！?!?!?!」」」」

再びクラス内が絶叫に包まれた。

パパラッチと名高い朝倉が落とされたのだの、私も欲しいだのあれって間接キスじゃないの!?!? などなどそれはそれはカオスな空間へと変貌した。

アサギや委員長が生徒達を宥めるも効果は無い。

しかもその元凶が「もしかして皆も食べたかった?」と的外れな事を言うものだから新たな燃料投下を受けて再び教室内は戦地と化すのだった。

このかや刹那に視線で救援信号を送るも何故か涙目で睨み付けられそっぽを向かれ。

授業の終わりを知らせるチャイムが鳴るまで騒々しいままだった。

なんとか皆を落ち着かせ、次の授業が始まる前にと用意していたプリントを配った。

「えー皆に行き渡ったか? 今渡したプリントは宿題だからちゃんと記入しろよー。次の英語の授業の時に提出してもらおうから」

プリントの内容は自分の誕生日や血液型、趣味などを英語で答えよ、
というものだ。

「まだ授業で習ってない単語とか混じってるんですけど」という声
が上がる。

「習ってなくても辞書で調べりゃ分かるレベルだから問題なし。誰
かに聞くなって手もあるしな。ただし、解答は一人一人違うだろうか
ら誰かの答えを丸写しするのは禁止な。ま、困ったらオレんここに
来れば手助けくらいはしてやるから」

頑張れよーと手をひらひらと振りながら去っていく。

2－A教室内。

「ねーねー朝倉ー。アサギ先生から貰った飴の味はどうだったのー
？」

「うえっ！？あ、ああー！あ、飴ね！飴は、おいしかったよ！」

「ほうほう。……んで？間・接・キ・スの味のほうはー？」

「そりゃ甘かつ……ってパルー！！せっかく人が忘れようとしてる事
をー！！」

「ほっほう？甘かったの？甘かったのね？」

「ぎゃー！これ以上掘り起こさないでー！！」

「やー、カッコええせんせーやったなー」

「うん。最初は驚いたけど優しそうだった」

「……えへへ。聞きに行ったら教えてくれるって言うてたね」

「だめだよ亜子。出来るところはちゃんと自分でやらないと」

「ちづ姉ー。分からない文法がいくつかあるから一緒に宿題しようよー」

「ええ、いいわよ。単語とかはちゃんと自分で調べるのよ？」

「う…。わ、分かってるもん」

「オイ、まだ一時間目なの分かってんのかコイツ等…」

「いつものことです。休みボケもなく平常運転だと思うのですが」

わいわいがやがや。

アサギが出て行った後の教室には頬を染めている者や情懷を抱く者から興味津々な者から無関心な者まで様々いた。その中でも表情豊かだった生徒がちらほらいた。

「…マスター？どうかしましたか？」

「いや…何でも、ない。あまりの騒々しさにうんざりしてただけだ」

驚愕と動揺の表情で授業の間中ずっとアサギを凝視していたエヴァ。

「アスナさん？珍しく今日は大人しかかったじゃありませんか。やはり担任が高畑先生じゃなくなってしまったのがショックだったんですの？」

「…へ？あ…ああ、そうね…それもあるけど…。あの先生、どこかで見た気がして…」

「アラ、お知り合いましたの？」

「うーん、わかんない。気のせいだと思うんだけど…」

少々の戸惑いと僅かな懐かしさを覚えたアスナ。

表情に違いはあれどこの2人は他のクラスメイトとは違った感情をアサギに抱いた。

「おや、どうした刹那。あの先生が人気なのがそんなに気に食わないのか？今朝のことといい独占力が強いんだな」

「うるさい龍宮。私にとってアサギ姉様は特別なんだ。…それに今朝の事を忘れたとは言わせんぞ」

「む。毒蛇だったか」

「えっと…こ、このかさ…？どうしたの…？」

「むー…あさぎねーさまのアホー…」

…若干不機嫌な刹那とむくれているこのかはとりあえず置いておいた。

5話（後書き）

とりあえずアスナとエヴァにフラグを立ててみた。
どっちから攻略しようか迷い中。

6話（前書き）

まだまだ一日は終わらない。

6話

赴任して1日目の仕事がようやく終了。

キイと椅子を軋ませながら背もたれに身体を預け、背中をぐっと反らした。

ため息を吐きながら今日1日の出来事を思い出す。

2－Aを含めて今日だけで4クラス分の授業を行ったがどのクラスも大騒ぎで1日目は全く授業にならなかった。

休み明けだというのに麻帆良の生徒は疲れた顔など何一つなく、アサギという新任の教師を前に好奇心をむき出しにしてきた。

交流も兼ねて対応していたものの、彼女達の興味は尽きる事がなかった。

女子中学生ってパワフルだなあとthinkしながらも明日からはしっかり授業をしなければと決意。

特に2－Aは学園長から学力向上を言い渡されている。

成績表を見たが：うん両極端だな、というのが正直な感想だ。

学年トップレベルが数人いるものの、それを帳消しにするかのように学年最下位が5人。

後は大体真ん中ら辺：だが、もっと細かく見ると1～300位以内が1／3、300～737位以内が2／3を占めている。

全員を300位以内に：などとスパルタなことは言わないがせめて全員が500位以内まで上がれば平均点も自ずと上がる。

テストの点数を上げる為には常日頃からの積み重ねとそれぞれ個人に合った効率的な勉強方法を確立させること。

効率的な勉強方法を見つけるには弱点：何が苦手なのかを自覚する必要がある。

それさえ分かればあとは弱点を克服出来るように勉強するのみだ。

自分で考え、それでも分からなければ誰かに聞き、再度考える。

このサイクルを自分の中に作ってしまえば勉強に対する苦手意識も少しは緩和されるはずだ。

英語がきっかけになって他の教科も同じようになれば言う事はない。

…とまあ、教師らしいことを考えながら下準備の為のプリントをせっせと作り始めるのだった。

「…初日から頑張りすぎじゃね？」

自分で言うのもなんだけどさーとぶちぶち言いながら暗い廊下を歩く。

授業用のプリントを作成してかれこれ数時間。

慣れないPCを使って時間を食うよりはとガリガリ書いて作成し、プリントを印刷し終わる頃には日は沈みかけていた。

職員室には自分以外は誰も残っておらず、施錠してから部屋を出る。廊下を歩きながら窓の外の日をぼんやりと見る。

それだけでなんとなく疲れを忘れられるような気がした。

「あ…っ！ やっと見つけたー！」

「ん…？ アス、ナ？」

疲れきった身体のとろとろと動かして後ろを振り返るとそこには両手に買い物袋を持ったアスナがいた。

アサギを探していたようで見つけた瞬間どこかにメールを送ると、こちらに接近してきた。

「誰も先生の連絡先知らないしどこにいるかも分からなくて探してたんですよ！」

「え？あーごめん。一応さっきまで職員室にいたんだけどすれ違いになったのかもな」

「そうだったんですか。えっと、2－Aの教室まで一緒についてきてもらっていいですか？」

「ん。いいけど」

忘れ物でもしたのだろうか、と思いながらアスナの後を着いていく。

…あれから10数年か。

昔を思い出しながらアスナの後ろ姿をぼんやりと見る。

久々に会ったというのにアスナの記憶が封じられているお陰で感動の再会などというイベントは起きていない。

まだアサギの事を思い出してなくとも元気そうな姿を見ただけで今は満足だ。

昔の仏頂面からは想像できないほど感情豊かで、幸せそうだ。

「…なんで頭を撫でてるんですか？」

「あ、つい」

思わず感極まったから、とは言えない。

誤魔化すにしても適当な言い訳は浮かんでこず、怪訝な視線がアサギに向けられる。

にははと笑い流して撫で続けていたが、アスナがそれを咎める事はなかった。

むしろ甘んじて受け入れているような…そんな節もある。

数分は撫で続けていただろうか、そろそろ手を離さなければとも思うが止め時が分からない。

「…ん」

心地良さそうに声を漏らすアスナを見ると止めていいものか判断に困るのだ。

それに、目を閉じて撫でられているアスナが昔の姿とダブリ、もう少しこのままでもいいと思う自分もいる。

もう少し、くらいなら―と続投を決意した矢先。

アスナの携帯が静かな廊下に鳴り響き、現実に戻された。

「もしもし…いいんちよ…？ああっ！？ごめん、先生見つかったから今連れてくわ！じゃ後でっ！」

「どした？急ぎの用だったのか？」

「…っ！り、理由は後で話すから着いてきて！」

顔を覗き込むと顔を背けられ少し凹んだ。

顔が赤く見えるのは夕日に照らされている所為だろうか。

「ちょ…っ」

腕を掴まれ、そのまま廊下を駆け出した。

アスナに引つ張られながらバタバタと走る。

無理矢理速いスピードで走らされ、体力の無いアサギは数秒でバテた。

「はい到着…って、先生大丈夫？」

「ぜー…はー…ぜー…はー…。そう…見える、か…？」

息も絶え絶えだ。

「ア、アハハッ！と、とりあえず教室に入って！」

誤魔化すように後ろから背中を押され急かされるようにして教室のドアを開けると――

「「「「アサギ先生、2―Aへようこそーっ！！！」」」」」

パン、パン、パンパーンと軽快な音と共に歓迎の声に迎えられた。さあさあ入って入ってー！と促され、主賓席へと案内される。

「おお…」

顔にこそあまり出なかったがアサギは感動していた。

まさか赴任初日から歓迎会なんて開いてもらえるとは思っていなかった。

ここまでされて悪い気などする筈も無い。

「主賓はこっちこっちー！」

「料理は2―A自慢の料理人が作った手作りなんだよー！」

かんぱーい！という声を合図にアサギの歓迎会が始まった。

「あむ……料理うまっ！？こんな肉まん初めて食べたよ」

「喜んで貰えたようで何よりネ。コッチも作た甲斐があるヨ」

「いやホントうまい。中身も勿論うまいしあと個人的には皮が好きだな」

「ふふ。じつは皮に秘密があるんですよ。」

「お、やっぱそうなのか。いやこれならいくらでも食べれそうだ」

四葉五月と超鈴音が作った料理に舌鼓を打ち、

「バスケットにサッカー、水泳に新体操……4人は運動部なのか。どうりで引き締まった身体をしてるなーと思ったよ」

「運動部言うても私はマネージャーなんですけどね」

「でも亜子サッカーするの好きじゃん。ドリブルとかリフティングだって出来るし」

「へえ、オレは運動あんま得意じゃないから羨ましいよ。今度部活やってるところ見に行ってみようかな」

「はい、是非来てください。お待ちしてます」

「私の体操してる姿も見に来てくださいねっ！」

運動部4人組の部活見学を約束して親近感アップ。

「先生にお聞きしたいのですがイギリスの哲学書などお持ちですか？」

「ジェレミ・ベンサムとかバートランド・ラッセルあたりの有名どころのならいくつかあるけど分厚いんだよねー、アレ。他にも色々あるけど」

「えっと、せ……先生はよく本を読むんですかー？」

「それなりに。でも日本の書籍はあまり読んでないから何かおすすめの本とか教えてくれるか？お礼になるか分からんがオレの部屋にある本を貸すからさ」

「おーイギリスの本かー。英文なのがネックだけど興味あるなあ。マンガとか無いんですかー？」

「マンガは日本みたいに文化が無いからなあ。童話ならたくさんあるけど」

綾瀬夕映、宮崎のどか、早乙女ハルナの3人組とは本の話題で盛り上がった。

「「せんせー！どっちがどっちかわかるかなー？」」

「おお：鳴滝姉妹か。えーっと、右が風香で左が史伽：：だろ？一瞬分身の術か何かだと思ったよ」

「ヌ。拙者は忍者ではないでござるよ？」

「うおう！？びっくりしたあ！あー長瀬、楓：：だっけ？」

「ニンニン。拙者の名前を覚えてくれて嬉しいでござる。これからよろしくでござるよ、アサギ先生」

「「楓姉^{ボク}えは私達のお師匠なんだよー！」」

「お、おお：。忍者っていたんだな：」

そして鳴滝姉妹と忍者であることを隠す気があるのか分からない長瀬楓と戯れ、

その他の歓迎会に参加していた生徒達全員と話す事で交流を深められたような気がした。

「いや、初日から飛ばしすぎだろホント」

元気のいい女子中学生の女の子達と話した事で体力まで使ったのだろうか、少し話し疲れてしまったようだ。

先程まで仕事していた疲れも相俟って立ってるのが少々辛い。

一旦人の輪から抜け出して窓際の椅子に腰掛けて一息ついていると

なにやらじーっと睨んでいる人物が2人。

知らない振りをすることも出来るが今朝の授業のこともあるしなあと意を決して2人を手招き。

「このかに刹那。どした？」

「……」

ジト目で見られたまま何も言葉を発しない。

何か言ってくればまだ対処の使用があるものを、何も言わずに見つめられたところでテレパシー能力など持っていないアサギに2人の心情を察しろというのは無理な話だ。

何度か話しかけてみるが、拗ねた子供のようにぷいと顔を背けるだけ。

どうしたもんかと困ったように頭をかいていたが「あ」とふと思いついたように声を上げ、

「…ふえっ？」

「ひゃあっ!？」

刹那とこのかを抱き寄せ、そのまま膝に乗せた。

咄嗟の事で対処も出来ず気づいたらアサギの膝の上に腰掛けていた2人の顔は言わずもがな、真っ赤である。

「ん。そういや今日はまだこうしてなかったよな？」

「あ…」

「う…」

これでいいだろ?とばかりに満足気な笑顔を2人に向けてアサギはご満悦。

膝の上に座らされた刹那とこのかの顔が紅かろうと湯気が出ていよ

うともお構いなし。

その一連の様子を遠くから見ていた真名は「ご愁傷様」と呟いていた。

まあ、端っことはいえ教室で、しかもほぼクラス全員がいる中でそんなことをしていたら注目される訳で。

授業中にも何度かあった絶叫の嵐が教室中に響き渡るのだった。

6話（後書き）

歓迎会の前半戦終了。

まだ後半戦があるのです。

一日が長くて申し訳ないですorz

7話（前書き）

シリ阿斯&急展開。

7話

…なんでこんな事してるんだろう。

と、アスナは自分のとった行動に疑問を持ちながら溜息を吐いた。

2-Aの教室内は新任の先生の歓迎会という名目の元、どんちゃん騒ぎをしていた。

アスナはお手洗いからの帰りで教室に戻ろうとしていたところ、階段を上っていくアサギを見つけた。

歓迎会が終わったのかと思い一旦教室に向かうが騒いでいる声は廊下に駄々漏れ。

どんちゃん騒ぎが未だ継続中なのを確認し気付かれないようにこっそりとアサギの後を追う。

そして今現在。

アスナは屋上に繋がる扉から覗き込むようにして『2人』の様子を見ていた。

片方はアサギ、もう片方はエヴァンジェリン・A・K・マクダウェル。

無愛想であり周りと関わりを持たない子、謎が多いというか不思議な子、という印象しかなかったクラスメイト。

その子とアサギがいったい屋上で何をしているのか、何故か無性に気になる。

単なる好奇心とも言いきれない不安めいた何かがアスナを巡る。

何か会話をしているようだが2人が立っている場所からアスナの場所までは距離が遠く、何も聞こえてはこない。

アサギは背を向けている所為で表情は見えない。

エヴァンジェリンの方はどうかと観察しているとアサギがエヴァン

ジェリンの頭に手を置いて撫でている。
仏頂面だったのが徐々に柔らかくなり、顔もほんのりと赤みを帯び始めていた。

嫌そうな顔をしながらも満更でもないのをどうにか隠そうとして隠しきれていない。

その証拠に撫でるのを止めようとすると露骨に機嫌が悪くなり、撫でるのを再開するとエヴァンジェリンの顔が緩んでいる。

「…む」

見ていて非常に面白くない光景だった。

「私のことも撫でてたのに」と呟くもアスナ自身は気付かない。

悔しさとも苦しさともいえないこの胸のつかえるような感情がなんなのか理解できない。

2人を見ていたくないのに目が離せず、ここから立ち去る事も出来ず。

じっと食い入るように見つめていた。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「や。久しぶり、エヴァ。歓迎会で見かけなかったから下校してるもんだと思ってたよ」

「…フン。騒がしいのは好きじゃないからな」

ぶっきらぼうな受け答えに相変わらずだと思いつつ懐かしさが込み上げる。

けれど下手に笑顔を見せると「何を笑ってるんだ」などと難癖を付けられかねない。

アサギはなるべく顔に出さぬように気をつけ、平静を保つために口リポップを咥えた。

「んー、うま。エヴァもいる？」

「いらん。そんなものを食べたところで呪いが解けるわけでもないだろう」

「ちえ。オレの自信作なんだけどなー……ま、いいや。それよりエヴァは何が聞きたいんだ？」

「わざわざ私に言わせるつもりか？言わなくても分かるだろうに」

エヴァがジト目で睨みつける。

冗談でもなんでもなくその目には恨み辛みが籠っていきそうだった。

呪いで魔力を封印されていなければ雪山の魔法球に放り込まれた上で氷雪系の最強呪文をぶっ放されるだろう。

エヴァには悪いが今だけは呪いに感謝しつつ、麻帆良にいる理由を説明すると腑に落ちないという顔をしつつも納得はしてくれたようだった。

「麻帆良に来たのは今言った理由がそうだけど、個人的に来た理由もいくつかあってね。エヴァも含めて知った顔が何人か麻帆良に居たから会いたくなかったってのも一つの理由なんだ」

「…オイ、撫でるな馬鹿者」

「いーじゃん。昔はエヴァのほうが数センチ背が高いからって散々馬鹿にしていたんだから撫でる位見逃してよ。…うん、相変わらずキレーな髪で安心した。また前みたいに髪洗わせてくれん？」

「う……か、勝手にしろ」

撫でるといふよりかは髪を梳くようにエヴァの頭に置いた手を動か

す。

昔と変わらずエヴァの髪は上質な絹糸のように細く艶やかだ。
小さい頃に何度かエヴァと一緒に風呂に入った事もある。

エヴァのその綺麗な髪を触りたいが為だけにエヴァの髪を洗う役を
自ら買って出たのも今となってはいい思い出である。

エヴァからの了解も得た事だし、近いうちに髪を洗わしてもらおう
と心に決める。

「個人的な理由ってさっき言ったけどさ。エヴァは昔の約束…覚えてる？」

「…この私が忘れるとでも思っているのか？」

「いんや。執念深いエヴァの事だから覚えてると思ったけど、一応
確認っつーか社交辞令…かな？ま、とにかく。約束通り封印を解き
にきたよ」

「そう、か。お前が約束を果たしにきたということはナギはやはり
…」

エヴァの顔が悲痛に歪む。

かつてエヴァとアサギが交わした約束。

それは『ナギが約束を破ったら代わりに呪いを解く』というもの。

アサギがナギと一緒に旅をしていた時、エヴァはナギを我が物にし
ようと付き纏っていた。

まだ幼かったアサギからは変なおねーちゃんだなあという認識でし
かなかったが、長い事付き纏われていると愛着も沸いてきてエヴァ
によく懐いた。

最初は邪険に扱っていたエヴァも慣れてきたのか諦めたのか、最終
的にはじゃれついても何も言わなくなった。

付き纏われるのに飽きてきたナギがエヴァに呪いをかけた時、ナギは卒業後に呪いを解くと約束をした。

その時に自分もエヴァとの約束が欲しい、とナギの代わりに呪いを解くと一方的にはあったが約束を取り付けたのだった。

そして10年前。

ナギが行方不明になり、公式に死亡したと発表されエヴァは絶望した。

会えない。

声も聞けない。

もう、撫でてもらえない。

それは、呪いが解けないことよりも何よりも辛い。

アサギが「約束」果たしにきたことでかつて感じた絶望が蘇りかけたところでアサギの声に引き戻された。

「いや、ナギは生きてるよ。前に会ったし」

「何だと…？だってアイツは10年前に死んだ筈だ」

「でもオレは6年前にナギに会った。証拠にもならないかもしれないけど、オレがスプリングフィールドの姓を名乗ってるのは6年前にナギに貰ったからなんだよ。ま、詳しい事は後々話すけど」

一応、公式では10年前に死亡扱いになっているが別に死体などは発見されていない。

行方不明になり、消息を掴めなくなった事で死んだことにされているだけだ。

誰もナギの死に際を確認していないのにどうして死んだことになっているのか分らないが、アサギは6年前にナギと再会している。ナギに撫でられた時の感触は今でも思い出せる。あれは紛れも無い

現実だと。

「そう、か…。ナギの奴は生きているのか…！」

「うん、ナギは生きてる。だからエヴァも希望を持って生きようよ」

そんな嬉しさに震えるエヴァを引き寄せ、昔と変わらぬエヴァの身体は成長したアサギの身体にすっぽりと包まれた。

エヴァの方も特に抵抗する事も無く身を寄せる。

「希望…か。フ…吸血鬼の真祖と恐れられたこの私が希望を持つなど、できるものか」

「大丈夫だって。オレだってそうだった。昔は何も無かった。自分というものすら無かったんだから」

遠い過去の記憶。

何も無かった。

親など知らず、名前すら無く。

自分が何者かなんて分からぬ位空っぽで虚ろな存在だったあの頃。

『道具』として扱われていた人間の『代替品』でしかなかった。

害のある『災厄』としての認識しかなく、『人間』ですらない。

それを何の疑問も無く、全て受け入れていた。

自我のある今なら分かる。

あれは希望など一切存在しない地獄そのものであり、傍から見ても絶望以外の何物でもない。

ナギはそんな地獄も絶望も認識せずに受け入れていた空虚な己を救ってくれた。

「でもナギが生きてもいいんだって教えてくれた。希望を持ってい

いと言ってくれたから好きに生きようと思った。だからエヴァも光に手を伸ばしてみようよ。オレがその手を掴むから怖くないって」

自分はナギじゃないし、成ることは出来ない。

けれど、ナギが教えてくれたことを自分を通じて他人に伝える事は出来る。

「全く…この私がお前に諭される日が来るとはな…いいだろう、手を伸ばしてやる。…お前が言ったんだ、絶対にその手を放すなよ？」

「そりゃあ勿論。エヴァが放せて言ってもずっと掴んでるよ」

密着させた身体を一旦離し、額同士をコツンとぶつけて笑いあう。何か吹っ切れたのだろう、エヴァの表情は清々しいものだった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「なに、あれ…」

アサギ先生とエヴァンジェリンが抱き合っている。

会話が全く聞き取れないためどういう流れで抱き合うに至ったのか全く分からないが、多分知り合いで久しぶりの再会を果たして喜んでいるんだきつとそうに違いない。と自分に言い聞かせた。

でなければ他に何かあるというのだ。

それ以外なんて考えたくないとアスナはよからぬ思考を振り払う。

「…訳わかんない」

ここで2人の様子を見ている事も、2人の関係も。
何故こんなに気になるのかも、自分の気持ちは何一つ分からない。

「そうよ、私が好きなのは高畑先生であってそれ以外はどうでもいいのよ…」

そう言い聞かせなければもやもやする胸中を誤魔化せない。

アサギ先生を見ているとどうしようもない懐かしさと嬉しさ、それに形容しがたい温もりが込み上げてくるのだ。

「いい加減にここから離れないと駄目よね…」

2人を見てもややもやすするなら見なければいいのに目が離せない。

「…私の、だもん」

自覚無く呟いたその一言。

嫉妬というよりかはまるで取られた玩具を返して欲しくて地団駄を踏んでいる気持ちに近いものがあった。

熱に浮かされたような表情のまま、アスナは覚束ない足取りでその場を後にする。

教室に戻ってもまだ歓迎会は続いていたが、気分が優れないのを理由に寮へと戻りベッドに突っ伏した。

アサギ先生に抱いた感情が何なのか、何故そんな感情を抱いたのか。

もやもや、ぐるぐると緬い交ぜになった何かがアスナの中で巡っている。

「気持ち悪…」

今はもう何も考えたくない、と未知の感情から逃げるように毛布を被った。

そうして眠りに身を委ねたアスナは夢を見る。

それは遠い昔、アサギと出会った頃の過去の記憶だった。

8話（前書き）

ちよつと頑張つて戦闘パートもどきを入れてみた。

8話

「や、おはよう」

おはようございまーす！と元気な声が聞こえる。
その返事に満足したように頷くと言葉を続けた。

「さて、今日は皆がお待ちかねの中間テストの時間だ。ま、特に心配もしてないけど気ー張り過ぎずにテストと向きあいな」

クラスを見渡し1人1人の顔を見つめる。

緊張している者は数人いたが不安そうな表情をしている者は1人もいない。

歓迎会から1ヶ月が過ぎるのはあつという間だった。

毎日が祭りだというように常に話題には事欠かない麻帆良でのひと月はイベントだらけの日々。

しかしそんなものは関係ないという感じでアサギの2-A学力向上計画はじわじわと進行中だった。

特別な事は何もせず、アサギ自作のプリントを中心にして授業を進めるだけ。

アサギの授業方法はこんな感じだ。

毎日宿題としてプリントを出し、同じプリントを次の授業の始めに
もう一度やる。

その2枚のプリントを自己採点し、点差を比較して同じ問題をやっ

ているのに何故間違えたのかを自覚させる。

自分で調べて考える癖をつけてもらう為に辞書で調べるのは許可していた。

自己採点させるのも自分の今の学力を意識してもらおう為でもあった。プリントの内容そのものは復習も兼ねて1年のときの内容を混ぜつつ、基本的には教科書に沿ったものにしてある。

大切なのは何が分からないのかを把握し、どうしたら理解できるのかを自ら考える事だとアサギは思っている。

分からないからとすぐ諦めたりせず、考える。

それでも駄目なら調べたり、教えを請うこともできる。

自ら学ぶ姿勢を作ってあげたら後は教師が教えることで生徒の手助けをすればいい。

流れさえ作ってしまえば生徒は自ら学ぶ姿勢を見せるだろう。

すぐに皆の学力上がるような派手な勉強法ではなかったが、ひたすら続けることで1ヶ月後には見違えるほどの変化が現れていた。

今日の中間テストは1ヶ月の成果を十分に発揮出来るだろう。

果てさて前回に比べてどれほどの成長が見られるか楽しみだと思いつながら試験開始を見届けた。

「いい天気だなあ…」

テストの試験監督ではないアサギは特にやることも無いので広場を散歩していた。

何処もテストや授業をしている為に広場には人が無く、のんびり

するには丁度いい。

寮でだらけるのも悪くないが折角の晴天なのだから日向ぼっこも悪くないなと思っていた。

…というのに。

「お呼びじゃない客が何人いるのやら…」

広場には陰陽師の式神らしき鬼やら魔法使いの使い魔と思わしき獣がアサギを囲んでいた。

その数は約100くらいだろうか、式神と使い魔が人1人取り囲んでいる図は集団リンチに見えなくも無い。

自分がこの場に來たのは偶然なのか誘き寄せられたのかこの際どうでもいい。

問題は広場に強力な結界が張られており増援を呼ぶ事も逃げる事も出来ず、全員倒さないと出られないということだ。

唯一の救いは空間を切り離すタイプの結界のお陰で外部と遮断されているところか広場にトンデモ集団がいることすら気付かれないという点。

つまり、どれだけファンタジーじみたことをしても誰にも気付かれない。

周りの目を気にせず戦えるというのは割と重要だ。

「和洋折衷選り取り見取りーってか。んなバイキング全然嬉しくないし、君らには早々にお帰り願いたいんだけど」

「それは出来ん相談や。ワシ等も雇われの身やさかい、ねーちゃん倒さなあかんねん。その後にこのか嬢を攫えって言われとるし」

「…同じく我が主よりお前を先に消した後で姫神子を攫えとの命令

を受けている」

各魔物を統率しているリーダーらしき鬼と使い魔が代表して口を開いた。

「ふむ、共闘ってよりはタイミングよくかち合ったところか。時間差で別々に来られるよりはマシと考えとくよ。……めんどくさいからまとめておいで」

指輪に魔力を込めると同時に四方八方から襲い掛かる。

が、迫り来る鬼の金棒も使い魔の魔法もアサギには届かない。

半径5メートル内にいた敵は全て消え、攻撃も当たることなく打ち消されるようになってなくなった。

それでも怯むことなく敵は攻撃を続けるも、何一つ当たらない。

「魔法主体なのが運の尽きだな」

「ぬ……う……っ！これは……！」

必死に魔法を撃ち込んでいた使い魔達は足元が光りだすのを見て驚く。

とある魔法陣が使い魔達の足元に展開されていたからだ。

「強制契約解除と送還の魔法をコンボで発動した。使い魔の君達はこれで退場ってね」

「……！！」

「じゃね」

使い魔のリーダーが何かを口にする前に広場から使い魔達が全て消える。

残るは鬼達だけだ。

「おおぅ…ねーちゃん凄い技持っとるのお…」

「技ってどうか指輪に強制契約解除の魔法と送還の魔法を登録して
たから魔力込めて発動したってだけなんだけどな」

「西洋の術はよう分からんが強力なのはよう分かった。ワシ等も心
してかからんといけんようやな」

「……?…っう、おっ!？」

真正面から馬鹿正直に打ち込まれた正拳。

咄嗟にガードするも吹っ飛ばされて近くにあった石像に激突した。

一応気休め程度に身体強化の魔法はかけていたものの、それを覆す
かのような威力。

「いって…戦いの歌でも登録しておくんだったなあ…」

目立った外傷はほとんどない。

しかし左腕を石像に強く打ち付けたようで赤く腫れている。

どうやら折れているらしく、思うように動かない。

生憎手元にある指輪には治癒魔法を登録しておらず、左腕をかばい
ながら鬼達の猛攻を交わすのがやっとだ。

体術の部類を一切学んでいない為、身体強化で従来の運動神経が少
々底上げされたレベルでは反撃も出来ない。

「ほらほらさっきの威勢はどないしたあ!逃げてばかりじゃどうし
ようもないで!」

「んな事は分かってる…って!うわったあっ!!」

チツと掠る音が聞こえ、焦げ臭い匂いが鼻をつく。

直線的な攻撃故に素人でもかろうじて見切れるレベルですれすれの
所で交わしているが正直キツイというのが本音だ。

いい加減決着をつけなければ体力が先に尽きるのはこちらだ。
大きく深呼吸をして鬼達を見据える。

「お？　どうやら覚悟を決めたようやな？」

「ま、ね。ぶっちゃけしんどいし、さっさと終わらせるよ」

――奪え。

そう呟くとリーダー格の鬼を残して他の鬼達は跡形もなく消え去った。

「んな…！？　…ねーちゃん、何をしたんや…！？」

「何ってさっきと同じ、強制送還魔法を使っただけ。さっきのは魔法具頼りの力だったけどこっちは自前の能力…といっておこうか。悠長に喋ってるけど、そろそろ時間差でおっちゃんも送り返されるから安心してよ」

「…エライ力やなあ。その力使えばワシ等なんて一瞬で蹴散らせたいと違うんか」

「強力な分、反動も大きいんだ…よ」

どさりと地面に崩れ落ちる。身体はピクリとも動かない。

鬼の方は足元からじわじわと消え始めているのを認めると攻撃の意思は無いとでも言うように武器を下ろした。

「無防備な奴を攻撃するのは性に合わん。ワシの力も抜けてきとるようやし、このまま大人しく帰るとするわ」

「潔いねえ…。おっちゃんみたいな奴は嫌いじゃないよ…戦うのは勘弁だけださ」

「ハッハッハ！　ワシもや！　ねーちゃんとは宴の席で酒を酌み交わしたいもんやな！　ほな、さいなら！」

威勢のいい笑い声と共に鬼は消え、広場にはアサギ1人。

一瞬だけ空間が歪んだかと思うと、元の風景に戻るのを見て結界が解かれたのだと知る。

術士の姿が見えないのを見ると小手調べのつもりだったようだ。

遠くで鐘の音が鳴っている。

ということは、ちょうど試験が終わったところらしい。

「やっべ：マジで身体が動かないし：」

慣れない事はするもんじゃないな、と呟く。

鬼達を一掃したのは「吸収」と「放出」の能力とはまた少し違う能力だ。

使える事は知っていたが自分の意思で使ったのは初めてじゃないだろうか。

元々持っている力だとしても使い勝手が分からなかった結果、力に振り回されてしまったが。

改良の余地有いかと考え耽っていたが、左腕の痛みによって現実を引き戻され、唯一動かせた視線だけで辺りを見る。

すると校舎のある方向から広場に向かってくる人影が視界の端に見えた。

「：何してるんですか」

「おー長谷川千雨か：。テストお疲れさん。手応えはあったか？」

「え、ああ：まあ、それなりに：ってそんな事よりも！なんで先生がボロボロになってるんですか！」

「や、まあ、少しばかり無茶したというか……にはは」

何があったのか、その詳細など話せない。

此処で起きた事を知るものはアサギ以外には居ないのだ、気軽に話せる話せる内容ではないし、話したところで信じてもらえないだろう。

しかしそれならば、何故。

ふと、感じた疑問。

千雨はテスト終了後、真っ先に此処に来たのだろうか？

「えーっと…。変なこと聞くけどさ、鬼とかモンスターみたいな格好した連中とか、見たり…した？」

「…麻帆良じゃそんなのいて当たり前ですから。一々驚いてちゃやってられないですよ。なんで先生があんな特撮ショーみたいな事をしてたのかは知らないですけど」

「特撮…まあ、無理矢理やらされた結果であって好きでしてたわけじゃないけども…って、なんか怒ってる？」

不機嫌な顔を隠そうともせず、軽くアサギを睨んでそっぽを向いた。

認識阻害魔法が効いているなら「麻帆良だから」となんの疑問も持たない筈だが、千雨の反応は少し違う。

「…気にしないでください。たまに麻帆良の空気についてけないだけですから」

何かを抑え込むかのように顔を歪ませる。

多分千雨には認識阻害魔法が効いていない。

その所為で現実離れした麻帆良での日常が精神に負担をかけているのだと推測した。

「そか」

アサギの肩を自分の肩にかけ、身体を引っ張り起こす。

どうやら医務室まで連れて行くこうとしているらしいが全く力の入らない人間の身体を運ぶのは容易ではない。

女子中学生となれば尚更だ。

千雨1人ではおそらく無理だろうと思い、誰か人を呼んだほうがと提案しようとした矢先、

千雨の手を離れ、不意に身体が浮いた。

「お…？」

「私が手を貸そう」

そこにはアサギを軽々と持ち上げる真名がいた。

千雨が何か言う前に寮に向かって歩き出す。

「お、おい！待て龍宮！」

「長谷川の力じゃ先生を運べないだろう？」

それから麻帆良の生徒からの生暖かい視線と何故か度々沸き上がる黄色い声に疑問を持ったアサギが千雨に尋ねるも、

「…先生は知らなくていい事です」

「オレが受けて真名が攻めとか言ってたけど何の事だ？なんか小説がどうこうなんてのも聞こえたんだけど…：真名は分かるか？」

「さあ？私にもよく分からないな。しかし個人的には私が受けでも構わないと」

「しっかりと理解してんじゃねーかつ！！」

「なあ、意味が分かんねーんだけど」

「分かんなくていいんだよ!!」

教えてくれる気は一切無いようだった。

そんなこんなで寮の自室まで運んでもらい、そのままベットに寝かされる。

「悪いね、また世話になった」

「報酬は後ほど請求するから気にする必要はないよ」

「ん、そか。報酬は全快してからきっちり払わせてもらうよ。千雨もありがとう。千雨のお陰であまり大きな騒ぎにならずに済んだよ」
「私は別に何も…」

「オレは千雨のお陰で助かったんだ。だから、ありがとう。礼にもならないが、ストレスとか溜め込んでんならオレの部屋おいで。

不満とか愚痴ならいくらでも聞いてやるから」

「…気が、向いたら。そうします」

「ん」

少しだけ、千雨との距離が縮まった気がして顔が綻んだ。

その後、アサギの身体が動かない事を知ったのかと刹那から過保護なまでの介護を受け、エヴァからは「貴様は馬鹿か」と罵倒をもらい、頑張った筈なのに誰からも労われることもなく。

「…この仕打ちはないわ」

思わず目から汗が滲みそうになるアサギだった。

8話（後書き）

そろそろ誰かと百合百合させたい。

主人公設定（ネタバレ含）（前書き）

ネタバレを含んでいますので、本編を読んでから見る事をお勧めします。

8／1

『容姿』と『趣味・嗜好』の項目を更新。

8／11

『赤き翼や2－Aクラスとの関係』の項目を更新。

『格好』の項目を追加。

主人公設定（ネタバレ含）

◆名前

アサギ・スプリングフィールド

◆年齢

見た目及び書類上は19歳

◆容姿

常に気だるげで眠そうな浅葱の瞳。

黒髪でシャギーの入ったウルフカット。襟足は長め。

身長は165?程。

スリーサイズはB76 W53 H77で無駄な贅肉のついていな

いスレンダーな体型。

髪型と身長の為か初見だと大抵男に間違われるが本人はあまり気にしていない。

◆格好

学校勤務時

ノースリーブのTシャツにデニムのパンツを着用し、その上に白衣を羽織っている。

寮に居る時など

シンプルで動きやすい服を良く着ている。

ユ○クロで服を買っているとかいいたか。

就寝時

上下の下着を着けずにYシャツのみ着用。

◆性格

マイペース。基本的に自分のやりたいようにやる。物事に対してあらかじめ準備をしておくしておく予習体質。頼み事には基本的にNOと言えない難儀な性格。人の心を挟るようにバツサリと物事を言うが、空気はそれなりに読める：はず。

◆趣味・嗜好

魔力を込めれば魔法を発動できる魔具の制作が趣味。魔法具の形態は指輪やブレスレットなどのアクセサリータイプのものを好んで作る。

依頼があれば補助系魔法（治癒、強化など）の魔法具限定で制作を請け負う。

攻撃系の魔法具を作らないのは悪用を防ぐ為である。

気に入った人には魔法具をプレゼントすることもある。

甘党。

授業中でも構わず棒付きキャンディーやタバコチョコを咥えている。自分で作って食べたり、おやつとして服の中に常備している。

◆体質

生まれつき呪文詠唱が出来ない体質。

循環能力と呼ばれる能力を持っており、魔力などを吸収したり放出することができる。

自作の魔法具で補助的に魔法を使っている。

生まれ持つ能力のお陰で魔法の攻撃などはほぼ受けないが

物理的な攻撃は普通に受けてしまうため、格闘家や剣士などの物理攻撃者とは相性が悪い。

◆能力

【catch&release】

放たれた魔法や気の攻撃を意識・無意識に関わらず吸収したり、吸収した魔法を放出する事ができる。

吸収した力は意識・無意識に関わらず貯蔵でき、その容量は無尽蔵。

◆赤き翼や2-Aクラスとの関係

20年前の大戦に深く関わっており、その時に赤き翼の面々やアスナと出会う。

その後（数年後）、ナギと一緒に各地を放浪していた時に下記の面々と親しくなる。

エヴァ：ナギに付きまとい始めたのがキツカケで仲良くなる。

木乃香と刹那：一時的に京都に住んでいた時期がありその時に出会い、数年程一緒に過ごす。

主人公設定（ネタバレ含）（後書き）

小説内で新たな情報が出たら随時更新していきます。

9話（前書き）

8／29 話の最後の方を加筆修正しました。

9話

…なんでこんなところにいるんだろう。

デジャヴ。

前にも似たような事を思った気がする、と思いながら椅子の背もたれに身体を預ける。

傍らのベッドにはアサギが規則正しい寝息を立てながら熟睡中。

アサギの姿を視界から外そうと天井を見上げ、大きく深呼吸をした。

「…いくらこのかの頼みとはいえ、断ればよかったかも」

呟いた言葉は誰にも届く事はない。

なんてことは無い、用事の入ったこのかからアサギの看病を頼まれただけのこと。

しかしそれはアスナからすれば一番避けたいものでもあった。

一月前の歓迎会の後からアスナは頻繁に不思議な夢をみるようになり、そして思い出した。

封じられた記憶、過去の記憶を。

ナギと呼ばれる青年と渋い中年男性に若かりし頃の高畑によく似た少年。

それにアサギらしき子供が出てくる夢だ。

前者の人たちが出てくる時は旅をしている夢が主だったが、アサギが出てくる時は2人で居る夢が多かった。

日本ではないどこか、まるでファンタジーの中の世界が舞台。
身体も心も自由は無く、言われるがままに力を使われその度に何か
が減っていく。

何も感じない空っぽな身の筈なのに苦しくてどうしようもなくて。
そんな時はアサギが手を握って苦しみを緩和し、アスナに掛かる負
担を肩代わりしてくれた。

何故助けるの、と聞いたらアスナの代わりだからと答えるのみ。

まるで自らの意思を持たない人形のように、アスナは自分よりも空
虚だと感じた。

その所為か握ってくれる手の温もりを感じるたびにどこか安心して
いた気がする。

それでもナギ達に出会ってからアスナもアサギも少しずつ変化が見
られ、感情を表すようになって：まあ、いろいろあった。

自由の身になってナギ達と旅をした事も、ガトーが亡くなった事も
思い出して泣きそうになった。

アサギとの別れも唐突だった。

―生きてりゃあ、また会えるさ。

そっくり残してアサギはアスナの前から消えた。

なんで離れていってしまったのか、問いたださなければ気がすまな
い。

アサギを見るたびに夢を思い出し、懐かしさと苦しさが込み上げて
抱きしめてやりたくなる。

泣きたくもなるし、一発殴りたい気もする。

アサギを前にするとそんなよく分からない感情が縋い交ぜになって
コントロールがきかず、この1カ月の間アサギを避け続けた。

気を抜いたらいろんな感情が爆発しそうで、気持ちを整理する時間

が必要だった。

気持ちを抑制するためにバイトと勉強に打ち込んだりもしたが、まあそれは大した問題ではない。

今こうして目の前にアサギがいるという事は、向き合う時がきたのだ。

「ん、う…んん…？あれ…アスナ…？」

アスナがアサギの頬を撫でる。

「…ただいま。アサギ」

―思い出したよ。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

思いっきり、ぎゅーっと。

頬を、抓られた。

「いひゃい！あひゅないひゃい！」

「うっさい。アサギには全部話してもらうんだからね。私の目の前から消えた事と戻ってきた事について、キツチリ、説明しなさい」

眠りから目覚めて優しく頬を撫でられたと思ったら思い切り抓られるという仕打ち。

アスナの記憶が戻った事に対して感動する余裕は微塵もない。

頬が千切れるんじゃないか思う程の痛みを与えられつつ、急かされるようにして赴任理由を説明し始めるとアスナは頬を抓るのを止めた。

旧知の仲にするのは何度になるだろう赴任理由の説明を終えたもののアスナの顔はふてくされたまま。

「赴任理由は分かった。あとは私の元から離れた理由をさっさと言いなさい」

「えーっと…言わなきゃ駄目か？」

「当たり前でしょ。言わなきゃその頬また抓るわよ。というかむしろ千切る」

アスナの目は本気だ。

流石に頬を千切られるのは勘弁願いたいので渋々ながら口を開く。

「あーもー、分かったよ。……上手いこと記憶が戻ったのは喜ぶべき事なんだろうけど、なんか、腑に落ちん」

「…何？文句でもあんの？」

ジロリと数十年分の恨みを込めて睨まれ思わず目を逸らす。

ただでさえ左半身を敷に突っ込んでる状態なのにこれ以上突っ込めば蛇以上のものが出てくる事は見えている。

「いやいやないっす。まあ簡潔に言うのアスナの元を離れたのは大人の事情ってやつが絡んでる。政治的利用を避ける為と存在そのものを危険視されてるから一カ所に置いておく事を懸念して離されたんだ」

アサギとアスナの能力は強力で使い方を一歩間違えるととても危険

な力だ。

大量破壊兵器、大量殺人兵器として扱えるほど強力な力を秘めている。

その2人が同じ場所にいることで都合の悪い連中や組織に狙われるのは目に見えており、いくら麻帆良学園が安全とはいえ2人を匿いきれるのか定かではないし、多くの一般人がいる学園が2つの爆弾を抱えるのはあまりにもリスクが高すぎる。

そのためアスナを麻帆良学園で、アサギをメルディアナ魔法学園で匿うことになった。

事前に聞かされていたアサギはアスナにまじないをかけ記憶を封印されても思い出すような細工を施してアスナの元を離れたのだった。

「そう。まあ、薄々そんなんじゃないかって気はしてたけど。やっぱりそうなんだ」

「そんな氣してたんなら抓んなくてもいいじゃん：ほったまだ痛いんだけど…」

「抓った理由はそれだけじゃないわ。私の知らない所でこのかや桜咲さんとかエヴァンジェリンさんとかとよろしくやってみたいだし？」

「…え？」

「私の！」

「あの」

「記憶が!!」

「ちょ…」

「無い間に!!!」

「ひいっ」

語気を徐々に強くしながらアスナが迫る。

逃げようにもベッドから出られない身のアサギはあつという間に距離は縮められ、ガツシリと顔を捕まれ逃れる事は叶わない。

「ち、ちよつと落ち着こうかアスナ。まだ記憶が混乱してんだよきつと」

「その心配は無用よ。ここ一ヶ月の間ずーっと昔の記憶と向き合つて整理してたんだもの」

「あ、さいですか」

目は完全に据わっていて滅多な事を口にしたらただではすまないだろうと直感した。

昔のアスナも拗ねた時は何を言っても聞く耳持たない状態になることがよくあり、その度に抱きしめて宥めていたことを思い出す。

早速実行しようとアスナの腰に手を回して引き寄せたところ、目の前にはアスナの顔。

「え…っ？」

「あ、やべ」

至近距離で顔を固定されていたのを忘れていた。
が、そんな後悔は後の祭り。

「…んっ」

「んうっ!？」

慣性の法則よろしく互いの顔は接近。

2人の距離はゼロ。

最初を感じたのは感触よりも懐かしい匂いだった。

柔らかな甘みのある香りが鼻を擦り少しの間だけその香りに浸る。

アスナの匂いだ、と嬉しくなって思わず抱きしめる力を強くするが、ふと口を塞がれたままなのを思い出す。

まだアスナは怒ったままなのだ、もしかしたら平手の一発でも食らうかもしれないと慌てて距離をとろうとするも、アスナは顔を固定した手を離そうとはしなかった。

嫌がられてはいないと分かると無理に離れる必要もないかと力を抜いてそのまま頭を撫でてやると、何処かにトリップしていたアスナがアサギの視線に気付いて慌てて距離をとった。

少々酸欠気味になったようでお互いに呼吸を整えて、改めて向き合う。

事が起こった後の沈黙は少々痛かった。

アスナが涙目で呟く。

「アサギに奪われた…」

「ごめんなさい！」

勢いよく土下座して謝る。

アサギはアスナの泣き顔に全面降伏するしかない。

「責任…とんなさいよ」

「オレに出来る事範囲でならいくらでも」

「ホント？」

「ああ」

「じゃあ私と契約して」

「ああ……へ？」

了承した後で要求された事を反芻していたら、先程と同じように至近距離に目の前には、アスナの顔。

そして背景には天井。

押し倒されていた。

「弱いくせに何でもかんでも背負い込もうとして。身体がぼろぼろなのも私達を守ろうとしてくれたからなんでしょ？」

「あー…うん、まあ」

「守られてばかりはもう、嫌なのよ。私にもアサギを守らせてよ」
「……んんっ!？」

そして再び唇に柔らかい感触が到来する。

距離をとろうにも押し倒された上しがみつかれて身動きはとれない。と、ベッドを中心にして暖かな光が2人を包む。

何事かと視線だけを下に向けると契約の魔方陣が展開されていたが、突然光が途絶えて魔方陣が掻き消える。

「……なんで？ 契約が…失敗した？」

「つぶは…はあ、はあ…。あー…言っただけで普通のやり方だと能力が邪魔して魔方陣がうまく作動しないんだよ。契約するには専用…というオレが作った魔法具を使わないと契約できないから…っと。ほい、これ」

一旦ベッドから降りて近くの棚から何かを取り出す。

それは何かの紋様が彫り込まれた指輪だった。

「指輪…掘り込まれてる紋様ってもしかして契約の魔方陣？」

「そ。昔もアスナが契約しようって言ってオレが無理って断ったら思いつき拗ねた事あったろ。だからいつか渡そうと思って作ったんだよ」

「覚えて…たんだ」

「にはは、そりゃあね。当時のアスナにしては珍しい我俣だったし……まあ叶えるまで結構な時間経ってるけど。手、出して」

アスナの左手をそっと掴み迷うことなく薬指にはめると、それに氣付いたアスナが思わずアサギをはたく。
べちんと音がしてアサギの右頬は赤くなった。

「な、なな……！何ナチュラルに左手の薬指にはめてんのよ！」
「痛てて……何怒ってんのか分からんけど……左手の薬指に指輪をはめると魔力の供給ラインがしっかり繋がるんだって」

それを聞いてアスナは顔を赤くしながら口をパクパクさせた。
そんな姫を尻目に氣を取り直してもう一度、と左手の薬指に契約の指輪をゆっくり通すと指輪が発光しだす。

「これからもアスナやクラスの誰かが狙われることがあると思うけど、オレ1人じゃ全て守りきれない。だから力を貸してくれるか？」

「当たり前でしょ。私だってアサギを守りたいんだから」

アスナの言葉に嬉しくなったアサギはアスナを抱きしめ、契約の口付けをする。

温かい光に包まれ、2人の仮契約は完了したのだった。

9 話（後書き）

記憶が戻って修羅場ってラブコメって契約完了。
キリのいいところで話を終わらせたかったので加筆しました。

10話

アスナと仮契約した翌日。

身体の方も回復し、仕事への復帰が可能になった事を学園長に報告しにいくと学園長と共にタカミチが待っていた。

襲撃の事はその日の内に伝えていたが、身体のことを考えて詳しく話せずにいたため、その詳細を伝える。

このかとアスナを狙った輩が直接本人達を攫わずにアサギを襲撃した理由。

向こうの戦力と護衛の力量がどれほどのものか確認したかったというのが大き。

だからターゲットを護衛している人物がどれほどの力を秘めているのかを確認するために、使い魔や式神を惜しげもなく大量投入して相手の出方を見たのだ。

おそらく敵側はアサギが式神と使い魔を相手が知りえぬ方法で一掃したのを見て、更なる刺客を送り込んでくるだろう。

しかしアサギ1人で全て対処しきれるほど万能ではないのは今回の結果を見れば分かる事だった。

その事を学園長とタカミチに報告すると2人は難しい顔で考え込む。戦力増強の為にせめてもう1人くらい欲しいところだが、おそらく厳しいだろうと思っている。

「おそらく徐々に強い刺客がアサギ先生の元に送りこまれるじやろうな。今回は能力の反動を除けば腕一本で済んだが、次回もその程度で済むとは限らんしのう」

「アサギ君1人で対処しきれないとなると誰かと組んで敵を排除し

てもらうのがいいだろうけど…生憎人手不足で人員を割けないんだ。せめて仮契約のパートナーでもいれば話は別かもしれないけど…」

「あー…そのことなんですが」

ももごとと言い辛そうに濁しつつアスナと仮契約した事、記憶を取り戻した事を伝える。

アスナの記憶については予めタカミチに伝えていた事もあったところまで驚いてはいなかったが仮契約まで済ましているとは思っていなかったようで驚きの表情を見せた。

記憶が戻ったことでアサギが赴任してきた理由も既に説明済みで、アスナ自身が護衛対象だと自覚した上で力になりたいと申し出ていることも合わせて説明すると2人は「まだ小さい子供だと思っていたが…」などと感慨にひたっていた。

（…見た目は子供だけど年齢で言ったら2人より年上な気がするんだけどなあ。）

沈黙は金。

とりあえず何も言わないでおいた。

アスナを戦力として追加するかどうかの話に戻り、結論としてはすぐには無理だということになった。

仮契約をしたとはいえ、魔法世界のお姫様とはいえ。

戦う事に関してはアサギも含めまだまだ未熟なことには変わりない。だから戦闘のプロに指南して戦いのノウハウを教えてもらい、ある程度まで成長したら任務に協力してもらう。

「その案に異存はありません。オレもアスナも、まだ自分自身の力を完全に使いこなせてるわけじゃないので。それで、オレとアスナは誰に鍛えてもらえばいいんでしょうか？」

「先程呼んだところじゃ。もうちょいで来ると思うのじゃが…」

ちらりと扉に目をやると、タイミングよく扉が開いて学園長室に入ってきたのはエヴァと茶々丸。

「ジジイ、来たぞ。用件はなんだ」

「実はのう、ちと頼みがあるんじゃないが…」

所変わってここはエヴァの家。

渋々ながらではあったがアサギとアスナの教育を引き受けたエヴァに呼ばれ、テーブルを挟んで対峙していた。

最初は穏やかな表情のエヴァだったがアスナとの関係及び仮契約を交わしたことまで説明した辺りから空気が凍った。

不機嫌なオーラ全開で2人を睨みつけるエヴァと負けじとガン飛ばしかえすアスナ、そして2人の様子に若干置いてけぼりのアサギの図が構築され、雰囲気はあまりよろしくない。

にもかかわらず、ギスギスした空気もなんのそのとアサギはさっさと本題を切り出す。

ある意味怖いもの知らずだった。

「学園長から聞いたとおり、これからエヴァに鍛えてもらおうわけだけど。その前にこっちの約束を果たさせてもらえる？　なんやかんやあった所為で随分延びたけど、エヴァの封印をなんとかするからさ」

「封印……解けるのか？」

「解くっていうか無理矢理破るっていうほうが近いね。オレと仮契

約して魔力ラインを繋いだら呪いの力を上回る量の魔力をエヴァに通して封印を破る感じになるかな。ナギが膨大な魔力を無駄使いして適当にかけた呪いだから正攻法じゃまず解けない。だったらナギの魔力を超える魔力を流し込めばいいってわけだ。エヴァ、左手出して」

「…指輪？それで仮契や…っな、ななな何をしているっ!？」

「？何がよ…ってうわエヴァの脈すげー速いし体温すげー高くなつて熱いんだけどどうしたん」

懐から取り出した契約の指輪を颯爽と薬指にはめようとするも全身を真っ赤にしたエヴァが慌てだす。

普通の契約とは異なる上に何の説明も無く左手の薬指に指輪をはめようとすれば大抵の女性ならば驚く事くらい容易に想像出来そうなもののだが、生憎アサギはそのあたりに無頓着故になんでエヴァが取り乱しているのかも分からなかった。

何をする！と動揺するエヴァと指輪してキスするだけだから！と宥めるアサギの押し問答は傍から見れば強引に結婚を迫る図に間違われかねない。

幸いエヴァの家で行われている出来事なので道行く人に勘違いをされる事態だけは免れているが、このやりとりを見せ付けられているアスナの堪忍袋は既に限界だった。

無言で2人の背後に立つと脳天に拳骨を叩き落とすとアサギとエヴァは短い悲鳴をあげて悶絶。

2人が抗議しようとするも凄まじい重圧を背負ったアスナに「とつ」と終わらせろ」と言われ、「さーいえっさー!」の掛け声とともにきばきと仮契約を済ませ、繋がった魔力ラインから大量の魔力をエヴァに送り込んで封印を破った。

「…封印、解けてよかったな」

「ああ…封印が解けて嬉しいはずなのに何故か感動できないがな…」

ハハハ：と乾いた声で笑いあう。

10数年もの間解けなかった呪いが解けて嬉しいはずなのだが、2人の心情は複雑だ。

アスナのプレッシャーによりサクサクと事を運んだお陰でムードもへったくれもあつたものではなかった。

サクサク進めさせた本人は未だ不機嫌そうではあつたが。

「事務的に事を運んだお陰でスムーズに終わったけど：：うん、まあ無事に仮契約も済んだし良しとしようか」

「う、うむ。そうだな」

エヴァの左手薬指には契約の指輪がしっかりとはめられており、それを済ました顔で眺めつつも優しい手つきで指輪を撫でた。

封印も無事に解けた（正確には破った）ので本来の目的を果たすために魔法球の別荘に場所を移す。

「神楽坂明日菜はアーティファクトを使った戦闘を茶々丸相手に実技訓練、アサギは身体能力の向上を含めた武術鍛錬を指導していく。何か質問は？」

「私は特に無いわ」

「はい質問。訓練メニューが異なるってことは個別に鍛えてくつてこと？」

「アサギはそもそも身体能力が人並みかそれ以下だろうが。魔道具を使わずに神楽坂明日菜レベルまで身体能力を上げてもらうには

個別にみっちり鍛えるほうが効率がいいからな」

「え、それって悪魔に魂売って言ってるのと変わらん気が…あだだだだ！耳っ！みみっ！！ちぎっ、ちぎれる！ちぎれるからああああお願いだから無言で耳引っ張んのはやめてください！！！」
「…むう」

ぎゅちぎゅちと妙に生々しい音を立てながらアサギの耳はひねられねじられ激痛が走った。

無言で睨みつけられながら全力で耳を引っ張られるのは肉体的にも精神的にも相当痛いものがある。

「ぬおお痛ってえ…：…つーか、耳からなんか…キンキンと変な音が聞こえんだけど…鼓膜は大丈夫なのかこれ」

「知らない。アサギは女心ってものを全く理解してないからこういうことになるのよ。その癖手当たり次第にいろんな娘を落とすんだから性質が悪いわ」

「ああ、全くだ。歯が浮くような台詞並べながら約束を交わしたりとかな」

「そうそう、約束交わしてそのまま10数年間行方知らずとか悪質な詐欺で訴えてもいいと思うのよ」

エヴァの家に来た当初は陰悪な雰囲気で見合っていたというのに今では息を合わせてアサギを非難する。

「ちょ…なんでこっち見て睨んでんの。オレ何も悪い事してないだろ」

「「自覚ないのが一番性質が悪いわ」」

「綺麗にハモってまで責められた!？」

散々だった。

「そ、そんなことより修行しようぜ！」

あのタラシをどうしてくれようか、みたいな雰囲気になんて耐えられなくなり話題を変える。

「逃げたわね」

「逃げたな」

しかしまたもや非難され。

もう勘弁してください：とアサギが頭を下げて2人は非難の矛先を向けるのは止めた。

アスナは茶々丸に連れられ別エリアへと行き、エヴァとアサギは武舞台らしき場所に移動する。

「神楽坂明日菜の方はそれほど手はかからんだろうからアサギは私が直々に指導してやる。お前の身体能力はあまりに低すぎるからな、肉体構造が変わるくらいの鍛錬プランをプレゼントだ。嬉しいだろう？」

「うわーうれしいなー」

初日から地獄が確定。

棒読みで形だけ喜んでみるがちっとも嬉しくなかった。

「ああそうだ、訓練にはノルマを設けていてな。達成出来なかったら罰として血を飲ませてもらうから死ぬ気でやらんと枯れるぞ？」

「うわああ鬼だ！鬼がいるっ！」

「フハハハ、私は吸血鬼だからある意味鬼だな」

「嫌味すら通じないとか辛い」

あくどい笑みを浮かべてニヤリと笑うエヴァに乾いた笑いと冷や汗しか出ない。

特にアサギは魔法具頼りで生きてきたところがあるので運動能力がほぼ皆無とっていい。

初日から既に生きて帰れる気がしなかった。

：

……

修行一日目、結果。

魔法球内某所では阿鼻叫喚の悲鳴が聞こえ、後にボロ雑巾になって
いるアサギと感卦法を使いこなしてご機嫌のアスナが見られたとい
う。

10話（後書き）

気付くと主人公が虐げられる話になっていた件。

そして補足ですがうちんとこのアスナ嬢は麻帆良学園に転入時のアスナみたいな感じのイメージです。

封印されてた記憶と現在の人格が交じり合った結果、雰囲気は姫神子だけど中身はすぐに手（暴力）が出るような子に。

…イチャイチャ話が書きたいのに遠のいていくのが辛いです。

11話(前書き)

前半部分がちよいエロ(?)
後半部分は真面目。

11話

いつ死んでもおかしくない程の殺人的スケジュールの中で1週間があっという間に過ぎた。

平日は教師としての仕事もこなさなければならぬ為、半日は学校で授業を教え、残りの半日は魔法球の中でひたすら鍛錬。

土日の休日は1日中魔法球の中で拷問の方がマシと思える程の鬼畜じみた鍛錬をじっくりみっちりこなす。

現実世界の時間では1週間だが、魔法球の中での時間に換算すると108日。

約3ヶ月程ひたすら虐げられ甚振られ嬲られの日々を過ごした。

過去形で説明を入れたが、現在進行形で修行は継続中である。

鬼畜師匠のエヴァからは『現実世界で』1ヶ月続けると言われている。

魔法球内の時間に換算すると約20ヶ月…もっと分かりやすくいうと約1年半。

スパルタ教育もブラック会社も真っ青の過密な修行が1ヶ月（魔法球内の時間で1年半）の間続くのだ。

睡眠と休息の時間はあるので肉体的疲労はそれほど酷くはないが、それよりも鬼畜師匠のシゴキによる精神的疲労の方が深刻だった。寝ても覚めても凶悪鬼畜な師匠の顔に脅かされる程精神的に参る羽目に。

エヴァのことが嫌いなわけでも苦手なわけでもない。

アサギを虐げているときの表情が生き活きとしているのがトラウマになりかけているだけの話だ。

だから束の間の休息はオアシスそのものになっていた。

「アサギねーさま最近疲れた顔しとるけど…どっか悪いん？」

「授業中の姉様はずっとフラフラしてましたが大丈夫なのですか…？」

「あー…平気平気。運動不足だから最近鍛えだしてね、思ったよりキツくてちょいと参ってるだけだから。こうして2人を抱きしめてるだけで疲労が回復されるようになってるから気にしなくてもいいからなー」

「やん、ねーさまあ…！」

「ひあう…っ！？お腹はだめ、です…っ」

両脇にこのかと刹那を侍らせ、そのままぎゅうと抱きしめる。

女の子特有の柔らかさと良い匂いをじっくりたっぷりと堪能するところで鬼畜師匠にボロボロにされた精神を癒していく。

このかはどこもかしこもふわふわと柔らかく、刹那は無駄の無い引き締まった身体の割に敏感な反応するのが堪らない。

ちなみに言っておくと、ただ抱きしめているだけでそれ以上は何もしていない。

2人の反応がちょっとばかり大げさなだけだ。

くんかくんか。

「このかの髪さらっさらだよなあ。つやつやで手触りもいいし、オマケにいい匂いもするし」

「やあ…！くびの後ろはあかん、てえ…っ」

すりすり。

「刹那は鍛えてる割にあんま筋肉質じゃないよな。背中とかやわらけーし」

「はう…っ!?! だめですっ、肩甲骨のあたりに顔を押し付けるのは…っ」

ここぞとばかりにやりたい放題。

項に顔を埋めたり、耳たぶを弄んだり、頬を撫で上げたり。

普通ならばセクハラで訴えられてもおかしくはないが女同士だし昔からの顔馴染みだから大丈夫と思ってるあたり性質が悪かった。

また数時間後には地獄へと赴かねばならない身なのだ、これぐらいしないとやってられない。

2人の声が艶を出し始めた辺りで満足したのか、

「…ん。堪能した!これでトレーニング頑張れるわ」

「ん…っ、はうっ…ほえ?」

「ひあ…う…っあ…?」

艶々とした笑顔でそう言うのと部屋に2人を残してトレーニングだー! といったながら走っていった。

「やあ…あさぎ、ねーさまの、ばかあ…」

「はうう…姉様あ…」

寸止めである。無自覚とはいえ鬼畜の所業である。

中途半端なところまで熱を高められた上の放置プレイはまだ色を知らない少女には拷問に等しい。

身体の疼きをどうする事もできないまま悶える哀れな少女2人がどうやって熱を収めたのか知る者はいなかった。

＊ ＊ ＊ ＊ ＊

「ふ…っ、はあ…っ！」

「温すぎる。私を殺すつもりで来ないと殺られるぞ？」

「くの…っ！それでも精一杯なんだって、ば…！！」

エヴァはアサギの攻撃をもともせず、まとわりつく蚊を払うかのようにあしらう。

常人レベルを超えた鍛錬をこれでもかというくらい叩き込まれたアサギだが、身体能力はようやくとかつてのアスナと同レベルまで担った程度。

アスナはというとアーティファクトのハマノツルギを悠々と振り回して笑顔でエヴァと戦り合うまでに成長してしまったのでアサギなど足元にも及ばない。

現在は感卦法の訓練の為に雪山に籠もってるらしいが成長速度に恐ろしさすら覚えてしまう。

あっという間に茶々丸では相手にならなくなってしまい、現在はアサギの介抱役に徹している。

「そんなヘナチヨコな拳じゃ私に掠り傷一つ付けられやしないぞ、情けない」

「ど…っ、うわ…！！」

渾身の一撃すら避けられるものをあえて受け止め厭らしく晒う悪魔。受け止められては叩きつけられ、受け流されては叩き潰されの繰り返し。

毎回の事ながら身体は既に満身創痍だった。

「はぁ…まぁ、始めて一週間じゃこんなものか。アサギ、能力を使って良いから私を地に跪かせるくらいはしてみろ」

「跪かせ…ってハードル高くね！？そこは一撃当ててみろとかそういうんじゃないの？」

「甘ったれるな馬鹿者。能力の使用を認めただけでも十分譲歩しているだろうが」

「いや、まぁ、そうだけどさ…しゃーない、能力使った事に対して後で文句言うなよ？」

軽く深呼吸をし、ゴミを見るような目でアサギを見下すエヴァを見る。据える。

あまりの恐ろしさに目を逸らしかけた。冗談抜きで怖い。

「あんまり時間はかけらんないからちゃっちゃといくよ」

「さっさと来ー」

何の前触れも無く。

視界からアサギが消える。

気配を探ろうとするも掴めない。

何処にいるのか全く分からずに戸惑っていると、

「エヴァー後ろ後ろー」

背後から声が聞こえた。

「な…っ！？いつの間に…っ」

振り返る暇もなく、両肩に手を乗せられ動けない。
それほど強く押さえつけられていないはずなのに、微動だにできない。

「アサギ…！能力を隠していたなっ！『吸収』と『放出』だけじゃなかったのか…！」

「隠してたんじゃないくて、言わなかっただけ。聞かれなかったしね。疲れるから使いたくなかったけど、エヴァに勝つにはそうもいってられないし」

—だから、ちょっと本気出すわ。

そう言って後ろからエヴァを抱きしめる。

「なっ、何をするっ!？」

「力押してか能力押しで跪かせようかと」

「フン、どんな能力かは知らんが不死身の吸血鬼がそう簡単に屈服するか…っん、むう!？」

まさかのキス。しかも深い方だった。

何をしてきても迎撃できる自信のあったエヴァだったが、まさかキスされるとは微塵も思ってはおらず必死にもがくも振りほどけない。それどころか絡められた舌を吸われる度に魔力が大幅に削がれていく。

不死身の筈のこの身が危険を感じるほど身体に力が入らない。

「ん…っ、ふ…っく……んむう…」

それよりも恐ろしいのは、このキスが全く嫌ではないということだ。力が奪われていく感覚があるのに抵抗する気は全く起きず、寧ろ委

ねてしまいたいとさえ思ってしまう。

もう身体はほぼアサギに預ける形になっていた。

「…ふぁ、んつく…：…んんんーっ！！」

エヴァの身体が小刻みに跳ねてその後くたりと倒れそうになったところをアサギがしっかりと抱きしめる。

キスの余韻というべきか能力の余韻というべきかは不明だが、エヴァの顔は紅潮し目も虚ろで息も絶え絶えだ。傍から見たら完全に事後である。

「ふー…オレの勝ちだ、な…」

誇らしげな顔でエヴァの耳元で呟いた後、アサギはぶっ倒れた。

2人の帰りを心配して様子を見に来た茶々丸によって無事回収された後、魔法球内の寝室に寝かされている。

修行が一段落着いて帰ってきたアスナからはこんこんと説教を受けつつエヴァとの勝負について説明していた。

「それで、勝負の結果は？アサギが勝ったの？」

「能力使っていいって言われたから、能力使ってエヴァに勝った。反動で動けなくなったけど」

「アンタ…また私の居ないところで無茶して…」

「ちょ、待って。説教の前に言い訳させて！今回はエヴァから許可を得たからだから！」

「それでまた中間テストの日みたく倒れてたら世話無いでしょうがっ！」

能力を使った事を軽くアスナに責められる。

仕方が無かったとはいえ、結果的に反動で倒れたことで心配させてしまったようだ。

「確かテストがあつた日も動けなくなっていたな……私との勝負でお前は一体何をした？……というかだ！そもそも何故あの……キ、キキ、キスをしたんだお前はっ！」

「キス……ですって？……どういうこと？」

「ちよっ、アスナ……っく、首っ！絞まるから……！」

キスという単語に反応したのかアスナがアサギの首をキリキリと締め上げる。

答えようによっては容赦しない、と暗に込めながら促す。

「げほ……っ！はぁ……はぁ……簡潔に言うとかエヴァとの戦いで魔力と体力、あとは時間を奪ったんだよ。キスしたのは直接触れてるほうが奪いやすいからだって……アスナも知ってるだろ。ていうかそれ以外に何があるんだよ……」

「うん……まあ、そんな事だろうーと思ってたけどね」

「悩んでたこっちが馬鹿に見えてくるな……」

「え、なんで2人してそんなオレを睨んでんの」

何コイツ本気で言ってるの？とでも言いたげな視線をアサギに向けた後、お互いを哀れむように視線を交わす。

ライバル的な間柄なのは代わらないが同じ苦労を背負う者同士としてある種の友情が芽生えていた。

当の元凶は相変わらず置いてきぼりになっていたがそれもお約束になりつつある。

「なんか腑に落ちないけど話を戻すぞ。オレの本来の能力は『奪う』ことなんだよ。能力は魔力だけじゃなくて物理的なものから概念的

なものまで、その気になればなんでも奪える。例えば時間だったり、命だったりね……まあ、何かを奪えば奪っただけ自分自身に跳ね返ってくる反動が物凄いなだけだな」

アサギは大したことはないという様にかからかと笑って能力についての説明を続ける。

何かを奪った分だけアサギ自身も何かを奪われる。

寿命や成長、魔力等といったその身で払えるものなら何でも構わない。

自分が奪ったものは自分の中に取り込まれてパワーアップするなんて都合の良い展開にはなることはなく、魔力に還元されてしまうと、いう不親切な仕様。

そんな不親切な能力をある程度抑えて開発したのが『吸収』と『放出』——【catch&release】だった。

相手の放った魔法の類を受け止めて相手に返すカウンター技として、擬似的に魔法を使用できるように魔法具を制作する上で非常に重宝する能力になったのはここだけの話だ。

他にも力を抑えてそれなりに使えるようにした技がいくつかあるが今は割愛する。

しかも厄介な事にこの能力は己の意思とは関係なく常時発動状態で常に何かを奪っていた。

その証拠に自身の能力によって魔力は常に減っている。

元々魔力だけは無尽蔵にあるお陰で少々もってかれたところで痛くもかゆくもないのが幸いだが。

しかも「何を」奪っているのかは全く分からないという状態。

アサギ自身のメリットがほぼ無い、非常に使い勝手の悪い能力だということ切々と説明した。

「まあこの能力の所為で昔は色々あったけど……アスナに会えたし、エヴァにも会えた。今の教師生活もはそれなりに楽しんでるし悪い事ばっかじゃないよ」

災禍の象徴として疎まれたこともある。

アスナの代替品、身代わりとして使われていた過去もある。

そして、自分以外の村人や弟分を助けられなかった。

割と波乱万丈な人生を歩んできているが、それでもなんとか生きている。

「教師やって修行もしてたまにやってくる刺客倒してさ。しんどいけどアスナもいるしエヴァもいるから頑張ってたよ。これからも能力使ってぶっ倒れる事もあると思うけど、死ぬつもりはさらさらないからさ。大目に見てくんないかな」

「…ん」

「むう…」

「オレがまたやらかしそうになったらさ、助けてよ」

膨れ面のアスナの頭を撫でてやり、ふてくされているエヴァの手を握る。

2人の顔は相変わらず険しいままだったが心なしか顔が赤くなっているようにも見えた。

「そんなの、当たり前でしょ」

「わざわざ聞くな、馬鹿者」

「ん。ありがとう」

そっけない言葉だが、棘はない。

2人なりの愛情表現だということはアサギがよく知っていた。

それから1ヵ月後――魔法球内の時間にして約1年半が経過。
アサギはAクラスのテスト成績最下位脱出と過酷な修行、偶にやっ
てくる刺客撃退を全てやってのけたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0524v/>

宵の空に星は瞬く

2011年9月16日09時11分発行